狂狼宴～サガ～

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狂狼宴～サガ～

【Ｎコード】
Ｎ６８１７Ｂ

【作者名】
太郎鉄

【あらすじ】
狼達による狼達の為の暴力の宴が始まろうとしていた。ある日、ロウジは自分の浅はかさから体臭野郎に愛する娘を人質に取られた。その日からロウジは体臭野郎の飼い犬になった。いつか体臭野郎を殺してやる。そのためならありとあらゆる暴力を厭わないーー。

1、ロウジ（前書き）

暴力描写と性描写に溢れておりますので、ご了承ください。

1、ロウジ

体臭野郎は言っていた。俺のシマで暴狼剤をさばいている奴らを探し出せ、俺の前に連れてこい。生まれてきた事を後悔させてやる。

ロウジは舌打ちしてステアリングに右拳を叩きつけた。

「何イライラしてんのよ」

助手席に座っているリナが呆れ声でいった。ロウジには目もくれていない。

「あんた、もっと冷静になりなよ。すぐキレるからいつも馬鹿見るんだよ」

うるせぇーー本音が飛び出そうになる。飲み込んだ。リナは体臭野郎お抱えの娼婦だった。機嫌を損なえば面倒な事になる。

「リナさんは腹たたないんですか。もうかれこれ二時間は貼ってるってのに、売人どころか鼠一匹現れやしない。俺でなくても苛つきますよ」

車はゲームセンターの駐車場に停めてある。体臭野郎の部下がかき集めてきた噂ーー新種の暴狼剤は二番街のゲームセンター、パンドラの駐車場で売人が売っている。

リナはサイドウインドを半分開けて煙草に火を点けた。

「勘弁してくださいよ。俺らがいるのがバレるでしょう」

視界がグレーに染まる。リナがロウジに煙を吹きかけた。

「鼠一匹通らないってあんたがいったじゃない。どうせガセよ。……何、その目。何か文句あるの？」

こめかみの血管が震えた。クソ売女が、いつか殺してやる。ロウジは顔を前方に戻した。リナの高笑いが聞こえた。

「粋がるなら最後まで噛みつきなよ根性無し」

ロウジは唇を噛んだ。血の味が口内に広がった。

体臭野郎——ロウジのボス。あるいは二番街のマフィアのボス。本名はバラス。狼というよりは豚だった。二番街の中心、クラブ・パラダイスに居を構え、全裸でホールに座す巨漢。部下に命令を下す時も、数人の娼婦にペニスをしゃぶらせている下衆野郎。

リナ——バラスお抱えの娼婦。バラスはリナを娘のように可愛がっている。リナはバラスの娼婦の中で、唯一人前でペニスをしゃぶらないですむ特別な淫売。あるいは、バラスの部下を顎で使える特別な淫売。

つまり、二人とも糞食らえ。ロウジは煮えたぎる憎悪を必死で抑えた。

腕時計を見る——午前二時。そろそろ潮時だった。

「ロウジ、出して。無駄足だったわ」

平坦な声。ロウジは目線だけリナに移した。赤のワンピース。突き出た胸。くびれた腰。組んだ脚は曲線美。体臭野郎が入れ込むのも無理はなかった。

いつか必ず、お前をズタズタに犯して殺してやる――ロウジは自分に誓った。神などいない事はすでに解っていた。

エンジンをかける――思い止まる。

「どうしたのよ？」

人差し指を唇にあてがえ、ロウジは耳を済ます。バイク音が近付いてくる。

「ねぇ、ちょっと……」

リナが左――二階建てのゲームセンターの非常階段を指差した。非常階段は駐車場に直結している。二階の非常口が開き、ガキの狼が三人出てきた。ガキが階段を降りきるのとほぼ同時に、フルフェイスのヘルメットを被った男がバイクを駐車場の真ん中に止めた。

ロウジとリナ――顔を見合わせた。リーチ。ビンゴになる可能性は極めて高い。

フルフェイスの男を三人のガキが囲んだ。ガキの格好――赤いキャップに黒のジャージ。この界隈でのさばっているストリートギャング。

フルフェイスの男――ライダースーツを着ていた。見たことがな

い。

「ロウジ」

「何ですか」

「あいつ知ってる？」

「ガキの方はこの辺りでのさぼってるストリートギャング。バイクの方は判りません」

「そう。じゃあ、ロウジはガキの方を頼むわ」

リナは自信ありげにいった。後部座席に体をねじ込ませ、バックを取る。短いワンピースから黒い下着がちらついた。ティーバック。桃尻に食い込んでいた。ロウジは勃起した。

「一人であの売人を誑かすつもりですか？」

「バラスには内緒よ」

「馬鹿な。危険すぎます」

当初の作戦ーーリナが売人を誑かし、適当なラブホテルに潜り込む。ロウジは尾ける。ラブホテルに侵入し、売人をぶちのめして頭の名を吐かせる。

「大丈夫。私を誰だと思ってんのよ」

誰だとーー淫売。体臭野郎に体を売る雌豚。体臭野郎の権力を自

分のものと勘違いしている馬鹿女。そう言ってやりたかった。言えなかった。

「それにそっちの方が効率がいいでしょう。少しは頭使いなさいよ」

ガキの一人がフルフェイスに紙幣を渡した。暗くてよく見えない。フルフェイスはガキに鍵を渡した。ビンゴ。

「行ってくるわ」

止めるべきだと思った。もしリナに万一の事があれば、体臭野郎がどれほどに怒り狂うか。想像しただけで虫酸が走る。悪寒が走る。

ガキ達がゲームセンターに戻っていく。リナはドアを開けた。

「リナさん……」

「さっさとガキを追いなさいよ、グズ」

ドアが閉まった。糞ったれーーロウジはリナを呪った。

リナがフルフェイスに近付いていく。体をくねらせ、媚びるようにして男の体を弄っている。

想像ーーリナは男に言う。私にもあれ、頂戴。男は答える。あれ？　リナは答えの代わりに男の股間を弄る。これとあれーー。

これーーペニス。

あれーー暴狼剤。

男はリナをケツに乗せるーー想像通りの展開になった。

バイクが駐車場から完全に消えるのを見届けると、ロウジは車を降り、ゲームセンターに走った。

二階の非常口からゲームセンターの中へ。電子音が耳障りだった。客はまばら。ロウジはホールを見回した。

ガキ共を捜すーーメダルゲームコーナー。いない。くたびれた親父がせっせとスロットマシーンにメダルを投入しているだけだった。

ガキ共を捜すーープリントクラブコーナー。いない。派手な化粧をした頭の悪そうな小娘達が短いスカートで股を広げて床にたむろしているだけだった。

ガキ共を捜すーーカーゲームコーナー。いた。一人がボックス型の筐体でレースゲームをプレイしている。残りの二人は退屈そうに煙草をふかし、誰もいない周囲に挑発的な視線を撒き散らしていた。

ロウジは隣の筐体に座った。ガキ二人がロウジを睨んだ。無視した。筐体にコインをいれた。乱入ーー隣のガキに対戦を申し込んだ。

画面から指示の文字が出る。車種を選べーー黒のスポーツカーを選んだ。コースを選べーーカーブの激しい峠を選んだ。

ガキの車は赤のセダン。割り込みで入ってきたロウジの車は後続から発車する。

ＣＧで再現された峠が画面に広がった。３、２、１――スタート。アクセルを思い切り踏みつけた。

ガキのセダンはロウジのやや前方をキープしていた。最初の緩いカーブ。抜けない。次の緩いカーブ。抜けない。次の急なカーブ。思い切りドリフトした。セダンに車をぶつける。セダンがスリップした。抜いた。

画面右下――バックミラーとして小さな四角のスペースに後方の様子が表示されている。ロウジはとにかくセダンの前をキープした。セダンが右に走れば右へ。左に走れば左へ。汚いやり方。セダンに勝ち目はなかった。

ゴール。隣から鈍い音とガキの喚き声が聞こえた。

「てめぇ、喧嘩売ってんのか」

「いや、今のは単なる憂さ晴らしだ」

ロウジが立ち上がると、三人のガキに囲まれた。ゲームをプレイしていたガキ――恐らくこの三人のリーダーがロウジの胸倉を掴んだ。

「なんだおっさん、俺らが誰だかわかってんのか」

「馬鹿ガキが。喧嘩を売るのはこれからだよ」

胸倉を掴んでいるガキ――キャップごと頭を掴んだ。筐体のディスプレイには先程の勝負がリプレイ再生されている。ロウジはガキの顔面をディスプレイに叩き付けた。画面が割れた。ガキの顔が血

まみれになった。

残り二人のガキーー目を丸くしていた。間抜け面。血まみれになったガキが地べたで顔面を押さえてのたうちまわっている。腹を蹴った。周囲がざわつく。店員が駆けつけてきた。

「お客様、困ります」

「俺は狼星会のロウジだ。ボスの命令でやってる。文句あるか？」

狼星会のボスーーバラス。店員の顔色が変わった。

「……失礼しました」

店員はロウジに頭を下げてそそくさと持ち場に戻っていった。まばらだった客ーーほとんどが姿を消した。頭の悪そうな小娘達だけが遠くから面白そうにこちらを眺めているのが見えた。

「あ、あんた、狼星会の人だったのか」

ガキの一人が聞いてきた。顔が青ざめている。床に転がったガキは気を失っていた。

「あぁ。お前らみたいな馬鹿なガキが、最近ウチのシマで暴狼剤をちんけな売人から格安で手に入れてるって噂を聞いてな。お前ら何か知ってるか？」

テストーー本当の事を話すか。それともはぐらかすか。ロウジをどこまで恐れているかに直結する問い。

「し、しらねぇよ、俺達、クスリには手をださねぇんだ」

答えたガキーーロウジから見て左。暗黒の憎悪が膨れ上がる。ガキのくせして俺を舐めやがるか。許せなかった。

ロウジはガキに微笑みながら肩を叩いた。ガキは困惑気味に視線を泳がす。頭突き。ガキの鼻が折れる。大量の鼻血が白い床を赤く染め上げた。

快感ーー自分より弱いものを痛めつける。屈伏させる。あらゆるドラッグを超越したトリップ。ロウジは勃起した。

「俺はな、見てたんだよ。お前らがヘルメットの売人に金を渡すところも、鍵を受け取るところも」

足下でガキが呻いている。快感が増幅される。膝蹴りを顎に食らわした。後頭部からガキが倒れた。気を失った。

残りのガキーー震え上がっていた。愉しい。愉しくてたまらない。

「さぁ。お前はどうする？　こいつみたいに嘘をついてぶちのめされるか？　それとも素直に洗いざらい俺に喋るか？　どうする？」

ガキに顔を近付けた。目尻に涙が溜まっている。愉しい。愉しくてたまらない。勃起が抑えがたくなる。

「は、話すよ。だから殴らないでくれ」

「よし」

ロウジはガキを嘲笑った。ガキは唇を震わせながら喋りだした。

一ヶ月程前、二番街の馬鹿ガキ共の中で奇妙な噂が流れた。暴狼剤を格安でさばいている売人がいる。その暴狼剤は今までものとは違う。一粒飲むだけで天国へ行けるーー。

「一粒で、しかも安い。なるほど、馬鹿ガキが群がるのも無理はないな」

暴狼剤ーー狼専用の錠剤型麻薬。既存のものは一粒で眠気が吹っ飛び、二粒で感覚が冴え渡り、三粒で天国に行ける。ただし一度にそれ以上服用すると、地獄の副作用が待っている。

「で、お前らはその売人を見つけ出したんだな」

「あぁ。いつも金を渡すと鍵を渡される。このゲーセンの一階にあるコインロッカーの鍵だ。その中に暴狼剤が十粒入ってる」

「一粒いくらだ？」

ガキの答えーー狼星会の十分の一の売値。狼星会の暴狼剤の一粒の値段で新種が十粒買える。

「売人はどこの回し者だ？」

「しらねぇ、本当だ。俺達も最初に尋ねたんだけど、余計な事聞くと命がねぇって言われて……」

ロウジはガキの表情を凝視した。恐怖に彩られている。ロウジに恐れおののいている。

嘘はついていないーー確実だった。

そもそも、初めからこんなちっぽけなガキに期待していたわけではなかった。あとはリナが上手く立ち回るしかない。リナーー無事だろうか。不安が蘇る。苛つきが募る。快感が薄れていく。ペニスが萎えていく。

「いいだろう。じゃあその鍵を渡せ」

ガキが目を逸らした。ロウジはガキの胸倉を掴んで顔面に引き寄せた。

「聞こえなかったか？　俺は鍵を渡せと言ったんだ」

冷や汗がガキの額から滝のように流れ落ちる。快感が蘇る。ペニスが膨らむ。

「こいつが、持ってる」

ガキが指差したのはリーダー格。ロウジは倒れているガキのジャージを調べたーー鍵はすぐに見つかった。

「なぁ、もういいだろう？　勘弁してくれよ」

青ざめたガキーー倒れている二人を心配そうに見ていた。

「こいつら、病院に連れてかなきゃ」

ロウジは笑った。

「そうだな。お前ら馬鹿ガキがやたらと暴れ回るから、二番街は怪我人だらけだ。ベッドの空きが三人分あるといいな」

「えっ？」

ロウジはガキの顔面に右ストレートを叩き込んだ。前歯が折れる感触。くぐもった声がガキから聞こえてくる。睾丸を蹴り上げた。絶叫――口を広げたせいで、血塗られた前歯が床に二本転がった。もう一度顔面を殴る。ガキは立ったまま気を失い、前のめりに倒れた。

頭の悪そうな小娘の一人がロウジに近付いてきた。媚びた目つき――リナの顔が小娘に重なる。

「ねぇ、お兄さん超強いね」

右腕に小娘の両腕が絡みついてくる。乳房が当たった。抑えがたい黒い衝動――解き放たずにはいられない。

「こいつらから暴狼剤取り上げたんでしょう？　ねぇ、うちらにもわけてよ。そしたらあたしがお兄さんに天国見せてあげるから」

股間を弄られる。

「超固いし～」

『さっさとガキを追いなさいよ、グズ』

小娘の声とリナの声が重なる。ロウジは小娘の髪の毛を鷲掴んだ。

「ちょっと、何すんのよ！」

小娘の仲間が一人走ってきた。腹を蹴飛ばした。血を吐いて倒れた。

小娘の歯がカタカタと震えていた。残酷な喜び。ロウジは小娘を個室トイレに連れ込んだ。

「離してよ！　やらしてあげるから」

小娘は半泣きだった。下着を脱がせ、壁に手をつくよう命令した。小娘は従った。ロウジははちきれんばかりのペニスを小娘のケツの穴に無理矢理突っ込んだ。

「ちょっと、やめてよ！」

「うるせえ！」

小娘がジタバタと暴れ出した。ロウジは小娘の頭を壁に叩きつけた。小娘が動かなくなった。ペニスが糞と血にまみれていた。

2、バラス

ミラーボールの艶やかな色彩がバラスの裸体をグロテスクに輝かせていた。

クラブ・パラダイスのホールは広い。最大収容人数が二千に届く巨大な空間は、二番街の狼達にとって最大の娯楽スペースだった。

バラスはホールの中心、円形に並べられたソファーに全裸で座り、三人の娼婦にそれぞれ両乳首、ペニスをしゃぶらせていた。

バラスの身長は二メートルジャスト。スキンヘッドの頭部には脂肪でできた巨大な皺が浮いている。肥えきった腹はソファーの前方一メートルの場所に置いてあるガラステーブルの上に乗っていた。

「脇、舐めろ」

左乳首を吸っていた娼婦にバラスが言った。娼婦は無言でバラスの脇に舌を這わせたが、一瞬だけ顔をしかめた。バラスはそれを見逃さなかった。

「俺の脇が臭ぇって面したな、てめぇ」

娼婦が困惑して首を振った。その首はバラスの巨大な掌に覆われた。

「お前ら、どいてろ」

二人の娼婦は顔色も変えずに席を離れ、ホールで踊り狂う幾多の

狼達の狂騒の中に消えた。
バラスは娼婦の首を掴んだまま、片手で体を持ち上げた。娼婦は苦痛と恐怖に無言の悲鳴をあげていた。
「久しぶりに、ぶちまけたかった。お前に決定だな」
バラスのペニスがそそり立った。勃起時には七十センチを超えるバラスのそれは、同時に鋼鉄の硬度を誇っている。
「脚、開け」
か細い声が娼婦から聞こえた。唇にはゆるして、と書いてある。娼婦はバラスの極太の腕を両手で掴んで暴れ出した。
「このまま首を引きちぎられるのと、最後にいい思いするのどっちがいい？」
娼婦にバラスの声は届かなかった。
バラスは強引に、座ったまま娼婦を貫いた。娼婦の絶叫は、ホールにやかましい程響いているＢＧＭにかき消された。
性器から大量の血液とバラスの精液を撒き散らした娼婦の死体が床に転がった。バラスはボーイを呼び出し、床と自分のペニスの清掃を命じた。
「ロウジから連絡は？」
ペニスを拭きながらボーイが答えた。

「まだ、ございません」

バラスの舌打ち——ボーイの手が止まった。ややあって恐怖に震えだす。

「続けろ」

「は、はい」

不安が募る。あの飼い犬はたかだか売人をぶちのめす程度の仕事に何を手こずっているのか。

奴に何があったところで構わない。問題はリナだ。あれほど止めたのに、ロウジと共に囮役を買ってでた。

『パパを愛してるの。だから、パパを舐める奴は許せない』

まやかしの言葉——信じたふりをして、喜んだふりをして送り出した自分が嘆かわしい。バラスは顔をしかめた。

「申し訳、ございません！」

バラス不快の原因が自分の《清掃》にあると勘違いしたボーイが、バラスに跪いていた。

「いいから続けろ」

舌打ち——感覚が短くなる。ボーイの額に脂汗が滲んだ。

リナ——最愛の娼婦。リナの為ならバラスは全てを厭わない。リナがいなければ生きていけない。

ロウジ——飼い犬。気に食わない糞狼。かつて、狼星会、バラスに牙を向いたろくでなし。救いがたい頭の悪さ。だが、腕の強さは驚嘆せざるを得ない。狼星会は一度、ロウジとオウキの二人に壊滅寸前まで追い詰められた。

ロウジに対する報復——ロウジの娘をさらった。幽閉した。ロウジは娘の居場所を知らない。娘の命はバラスの掌に握られている。ロウジはバラスの飼い犬になった。

リナの護衛はロウジに任せた。ロウジなら間違いない。奴は娘の為に、バラスの命令なら何でもこなす。何でもこなしてきた。

だが——。

胸騒ぎがする。リナは筋金入りのおてんばだった。何か、無茶をしでかしてはいないか。

ロウジにはリナの命令も聞くように命じてある——間違いだった。リナが無茶をする。ロウジは止める。口を出すなとリナが命令する——。

鳥肌がたった。ＢＧＭが耳障りだった。

「止めろ」

「はい？」

「このうるせぇ音楽を止めろって言ってんだ」

「……かしこまりました」

ボーイがバラスから見て左手――ＤＪブースに向かった。音楽が止まる。踊り狂う狼達が止まる。ややあって、ホールが不満の声で溢れた。バラスは息を吸った。

「うるせぇぞ、糞ガキどもが！　今日は店じまいだ！　さっさとでてかねぇならてめぇら全員皆殺しにしてやる！」

不満の声が消えた。五分もしない内に、ホールに残ったのはバラスと僅かなボーイや娼婦のみになった。

ボーイに携帯を用意させ、バラスはリナの番号を呼び出した。コール音――十コール目で留守番電話に切り替わる。

ロウジに電話する。十コール目でロウジが出た。

「俺だ。首尾はどうだ？」

「売人は見つかりました。リナさんが上手くやってます」

「リナは無事だな？」

「えぇ、多分」

左瞼が痙攣する。

「多分だ？　リナの居場所はわかってるんだろうが。お前はさっ

さと売人ぶちのめして頭の名前を吐かせろ」

「いえ、それが……」

バラスはロウジの説明に耳を傾けた。はらわたが煮えたぎっていく。灼熱の憎悪が目の前の景色を灼き尽くしていく。

「それで、てめぇは糞ガキに手間かけてリナを見失ったってのか？　どこの馬の骨ともわからねぇバイク野郎と消えたリナを」

沈黙。ロウジの返答を待った。ロウジは答えなかった。

「捜せ。日の出までにその売人とリナを見つけ出せ。さもなきゃてめぇの娘を俺のマラで八つ裂きにしてやる」

「娘に何かあったら、俺だって黙ってませんよ、ボス」

血管の千切れる音が聞こえた。バラスは右腕でガラステーブルを叩き壊した。

「うだうだいってねぇでさっさと捜せ！」

通話を切った。携帯電話を床に叩きつけた。

3、リナ

こんな安っぽいホテルで私を抱くつもり？

リナは喉まででかかった言葉を無理矢理飲み込んだ。バイクの男がようやくヘルメットを脱ぎ捨てたからだった。

金色の長髪。切れ長の眉毛。少女のようにはっきりした二重。バイクの男は美しかった。

ラブホテルーーハイウェイ沿いのショッピングモールのすぐ近くにあった。投げやりなベッドメイキング。シーツについた滲み。かすかに漂う精液の匂い。普段なら怒り狂うところだったが、その男の美しさに、リナはしばらく圧倒された。

男はベッドに腰をかけ、備え付けのテレビをつけた。AVチャンネルーーテレビ画面から喘ぎ声が聞こえてきた。

「座りなよ」

左耳から右耳へ言葉が通り過ぎていく。男が髪を無造作にかきあげた。流れる長髪から心地よい香りがリナの鼻腔に漂ってくる。ときめきの鼓動が体中で産声をあげた。

「ねぇ、聞いてる？」

我に返った。リナは男の隣に腰を落ち着けた。

横目で男を見る。男は無言でテレビ画面を見つめていた。そぐわ

ない。安っぽいラブホテルにアダルトチャンネル。この男の美貌の前に、チープな情景の全てがそぐわない。

私も？――リナは小さく首を振った。

「ねぇ。君、あれできる？」

男がテレビ画面の方向に顎をしゃくった。ディープスロート。女優がむせながらも男優のペニスを喉に詰まらせている。

「あれ、して欲しいな」

唐突な問いに、思わず頷こうとしている自分を抑制する。男のペースになっている。赦せない。赦しがたい。私を誰だと思ってるの？

リナは立ち上がり、テレビを消した。男に近付き、見下すような視線を送る。

「調子に乗らないで」

私はリナ。ありとあらゆる男を屈伏させる魔性の魅力を持つ女。全ての男は私にひれ伏し、私に仕えよ――。

「実をいうと私ね、本当は……」

「リナだろ？　バラスのお気に入りだったっけ」

驚愕――リナは口を開いたまま目を丸くした。

「あんた、知ってたの？」

「あぁ。知ってたよ」

男の表情に変化はない。然り、リナを見上げるその視線からは一片の恐怖も見受けられなかった。

バラスーー醜悪の肉塊。権力のみを魅力に持つ体臭野郎。おぞましい程に巨大なペニス。あれがデカければ女が皆涎を垂らすと勘違いしている救いがたい下衆野郎。リナの魅力に平伏した一番の獲物。だが、怒らせれば怖ろしい。バラスを怒らせれば女子供であろうと八つ裂きにされる。恐らくは、リナも例外でなく。

「わかった上で私を抱くっていうの？　バラスに喧嘩売るって事と同じよ。あんた、それも理解してるの？」

男は両肘を外側に曲げて困惑気味に口を開いた。

「何か問題でも？」

信じられなかった。バラスに喧嘩を売るという事が、どういう事か。それを解った上で恐怖がまったく顔に出ない狼が存在する事が信じられなかった。

「ねぇ、君が立ちっぱなしじゃこっちが落ち着かないよ。とりあえずやろう。話はそれから」

ベッドを右手で軽く叩きながら、男はリナに微笑みかけた。憎らしいまでに美しいーーバラスには永劫に手に入らない微笑。

この男は馬鹿なのだろうか。否、違う。リナは断定した。美と聡

明はいつだってワンセットで然るべきなのだ。私がそうであるようにーー。

馬鹿は醜い。例外なく醜かった。バラス然り、ロウジ然り。

ロウジーーバラスの飼い犬。体臭野郎に喧嘩を売り、あと一歩まで追い詰めたくせに爪を誤り、娘を人質にとられたどうしようもないろくでなし。考えるより先に体が動く。いつでも結果は愚者の末路。おぞましい。馬鹿で醜い男の事を考えると、いつだって吐き気を模様するおぞましさを感じた。

「そんなに、私としたいわけ?」

視線を挑発に変える。男はなおもリナに微笑みかける。

「したいね。君みたいな女の子とは、大抵の男がやりたがると思うけど?」

君みたいなーー憎らしい。君、ではなく君みたいなという表現が憎らしい。私ほどの女が他にいるはずないでしょう。リナは男を睨み付けた。

視線と視線がぶつかるーー憎めない。この美しさを憎む事が出来ない。

「色々教えてくれるなら、考えてあげてもいいわよ」

「面倒だなぁ」

股間に男の手が伸びる。下着越しに性器を触られた。

「君も濡れてるみたいだし、説明はやりながらでいいよね？」

濡れる？　私が？ーー濡れていた。男の指が滑らかに性器へ入っていく。ため息に似た喘ぎを漏らした。

抵抗ーー出来ない。この男としたい。この男の体を貪りたい。悔しかった。男の魅力に屈伏している自分が悔しかった。しかし、それを覆い尽くす快感が体中を駆け巡っていた。

リナはベッドに倒れ込んだ。男の口の中でリナの舌が踊った。

セックスーーベッドの上で脚を広げた。ワンピースを脱ぐのも億劫だった。下着を外すのも億劫だった。ティーバックをずらした。男のペニスがリナに入った。

快感。バラスから得る事が出来ないもの。バラスのデカマラからは苦痛しかもたらされない。

男はリナに覆い被さるようにして腰を振った。

喘ぎ声ーー叫び声に変わった。リナの耳たぶに男の舌が這う。体が震える。快感に肉体がはじけそうになる。

男の体を抱き締める。全裸になった男の体ーー筋肉に溢れていた。肉体も顔に劣らない美を備えていた。美しい肉体に触れるーーアドレナリンが加速度的に分泌される。

喘ぎながらリナは尋ねる。

あんた、何者なのーー。

俺はヤクル。呼び捨てで構わないよ。君の事はリナって呼んでもいいかな?

赦せない。私を呼び捨てにするなんて赦せないーー。

うるさいなぁ、こんなによがってるくせに。

ヤクル、あんたは、誰の命令で暴狼剤をーー?

じゃあ勝手に呼ばせてもらおう。リナ。俺はゼウスの使いさ。

言葉の衝撃ーーセックスの快感に混じる。性器が締まる。

ゼウスーー全十番街の狼の為の人工島、ウルフ・ロックにおいて、六~十番街を仕切るマフィア、神狼のヘッド。バラスですら恐れをなしていると噂される最強の狼。あらゆる禁忌を破って頂点に登りつめた男。通称、タブー・レス。

ゼウスの使いのヤクルーーバラスを恐れないはずだった。バラスを歯牙にもかけない美しさと、バラスに匹敵する強さを持つ男の部下。快感が究極に達する。

ヤクルを平伏させたい。私だけの男にしたい。私なしでは生きていけない男にしたい。そして、ゼウスもーー。

リナは絶頂した。

床に放っていたバックから携帯の着信音が流れていた。リナは携帯を取り出し、ディスプレイを確認した。
バラスーーベッドに寝転がっているヤクルに振り向いた。
「バラスだろ。ほっときなよ」
リナは携帯をバックに戻した。
「ゼウスはバラスを潰す気なの？」
「いや、あの人がその気になればとっくにバラスはあの世だよ」
「だったらあんた達、バラスの懐でどうしてこそこそ暴狼剤なんてさばいてるのよ？」
最初からそれは気にかかっていた。バラスに言った言葉を思い出す。
『パパを愛してるの。パパを舐める奴は許せない』
愛している以外は真実だった。バラスはリナの忠犬ーー自分の犬を馬鹿にする奴は赦せない。バラスを卑下出来るのはリナだけだった。だからこそ、自ら進んで囮役を買って出たのだ。
チンケな事をするちっぽけなマフィア。相手はきっと、そんなものだろうと思っていた。
だが、ヤクルが神狼の使いなら話は変わる。チンケに見えて、その実何かとんでもない裏が隠されているに違いない。

「教えなさいよ」

「いいけどさ、俺がそれを話すって事は、リナが神狼側に来るって事だよ。狼星会の、バラスの権力とはおさらばしなくちゃならない。それでもいいの？」

ヤクルは上体を起こし、鋭い視線をリナに向けた。

迷いーーそんなものはなかった。ヤクルを自分のものにしたい。最愛の忠犬に育て上げたい。体臭野郎と計りに掛ける天秤は、そもそも存在していなかった。

だが、気に食わない。あっさりと男を認めてしまうほど私は安い女じゃない。

「シャワー浴びながら考えるわ」

「御自由に」

リナは熱いシャワーを全身に浴びた。温度は感じなかった。すでに己の欲望の熱が沸点を超えているのが解った。

４、狂狼の双生児

がむしゃらにリナの携帯に電話をかけた。

一度目――留守電。

二度目――留守電。

三度目――圏外。

はらわたが煮えくり返る。リナに何かがあった。バイクの男がリナを――想像をかき消す。希望に縋る。

ロウジはガキどもから奪った鍵で、ゲームセンターの一階、クレーンゲームコーナーの脇にあったコインロッカーを開けた。

ビニール袋。中身を取り出した。小さな円形の錠剤が十粒――暴狼剤。

ロウジは車に戻った。暴狼剤入りのビニール袋を助手席に放った。

無意味とわかりつつも、もう一度リナの携帯にかける。無意味をさらに実感しただけだった。

ロウジは車を出した。

外の景色が猛スピードで後ろに流れていく。二番街と三番街を繋ぐハイウェイを走っていた。

『リナに何かあったら、てめぇの娘を俺のマラで八つ裂きにしてやる』

体臭野郎の言葉が頭の中で反復される。激しい頭痛に苛まされる。底無しの憎悪が視界を黒く塗り潰していく。

「娘に、メロウに手を出しやがったら、俺がてめぇをぶち殺してやる」

ロウジはひとりごちた。気分が晴れやかになる事はなかった。

タイムリミットは日の出まで。がむしゃらに車を走らせていてもリナは見つからない。左手にピンク色に輝くネオンサインの群を見つけた。二番街では一番規模の大きいラブホテル街。

ロウジはハイウェイを降りた。ラブホテル街の入口。小さな公園沿いの路肩に車を寄せた。

体臭野郎に電話する。開口一番にバラスは言った。

「リナが見つかったのか!?」

携帯を耳から離した。うるせぇーー怒鳴りつけてやりたかった。

「まだです。ボスに聞きたい事がありまして」

バラスの舌打ちが聞こえた。

「くだらねぇ電話してる暇があったらとっととリナを見つけ出せ」

「リナさんが男を連れ込むとしたら、どこらへんのホテルですか？」

沈黙ーーバラスは何かを考えている。

「あぁ、あいつがまだ俺と出会う前、普通に客を取ってた頃は、必ずエデンを選んでたって昔聞いた事がある」

エデンならロウジも知っていた。最高級のラブホテル。一泊の値段は並の狼では手を出せないほどの高額。

運が良かった。エデンは目の前のラブホテル街の中心にそびえている。

「当たってみます」

「必ず見つけ出せ。いいか、もしリナに何かあったら……」

ロウジは通話を切った。娘の事を言われたら、今度こそ怒鳴り返さない自信がなかった。

暴狼剤を懐にしまい、ラブホテル街を小走りでエデンへ。盛りのついた狼の男女が肩を組みながらいちゃついている姿がそこかしこで目についた。

エデンに到着。地上三十階建てのエデンは、ラブホテルというより巨大なＶＩＰ専用ホテルの様相を呈している。実際、ここを利用するのはそのほとんどが何がしかのＶＩＰだった。入口前の円形の噴水には、どこかで見た事のある老人と高級なブランドのコートを

着こなした娼婦が腰を据えて寄り添い合っている。
老人と目が合ったーー大貧民を見下す大富豪の目つき。
ロウジは老人に近寄り、顔面に唾を吐いた。そのまま目もくれずにロビーに入った。背後から老人の怒声が聞こえたが、追ってくる様子はなかった。
ロビーを見回した。赤い絨毯で敷き詰められたフロア。隅にはソファーとテーブルが置かれていたが、誰も座っていなかった。
「いらっしゃいませ」
カウンターの奥でタキシードに身を包んだ優男が頭を下げていた。ロウジは近寄り、カウンターに手をついた。
「お客様、お一人での御宿泊ですか？」
「客じゃねぇ。聞きたい事がある」
「はい？」
「ちょっと前に、ライダースーツの男と赤いワンピースを着た女が入らなかったか？」
優男は困惑気味な表情を浮かべた後、先ほどよりもさらに深く頭を下げる。
「申し訳ありません。お客様のプライバシーに関する質問には……」

カウンター越しに優男の胸倉を掴み、顔面を引き寄せた。睨み付ける。

「答えろ」

「も、申し訳……」

顔面に頭突きーー優男が鼻血を垂らした。

「答えろ」

涙目の優男がもがいた。もう一度、額に頭突きをいれた。優男がもがくのをやめた。

「そのような、お客様は、宿泊なさっておりません……」

ロウジは舌打ちして手を離した。優男が鼻を両手で押さえた。

「俺は狼星会のロウジだ。もしお前がそいつらを庇ってホラでもふいてたって事が後でわかったら、お前のケツの穴をデカマラのホモ野郎に掘らせる事も出来る。もう一度聞くぞ。ライダースーツの男と赤いワンピースの女だ。奴らがここに来なかったか？」

優男は首を振った。もう一度睨み付ける。優男の表情は恐怖に溢れていた。ロウジのよく知っている表情だった。これ以上痛い目には遭いたくない、この恐怖から逃げ仰せたい、そのためなら他人の犠牲を厭わないーーそういう表情だった。

嘘はついていないーー確信した。落胆した。

ロウジは両の拳で思い切りカウンターを叩いた。優男が小さな悲鳴を漏らした。

「くそったれが」

行き場のない視線を優男が右往左往させていた。苛ついた。ロウジは拳を握り締めた。

この優男をぶちのめしたい。この優男を思う存分ぶちのめして憂さを晴らしたいーー。

『落ち着け』

オウキの声が聞こえた。いつもの幻聴だった。ロウジの苛つきが限界を超えると必ず聞こえる亡霊の囁き。

落ち着け。ロウジは自分に言い聞かせた。

『考えるんだ。どんなにヤバい状況だって、考えれば、俺とお前なら切り抜けられる』

オウキの口癖。熱くなった脳みそが冷却される。絶対零度の嫌悪感が全ての憎悪を凍り付かせていく。

「お前はもういない」

ロウジは首を振った。両手で頬を叩いた。

考えるーーリナとバイクの男はここには来ていない。つまり、リ

ナの要求に応えるタイプの男ではなかった。リナの魅力に平伏する男ではなかった。

考えるーー男は冷静で頭がいい。あるいは、リナの正体に感づいていたのかもしれない。その上で、リナを何らかの目的に利用しようとしたのかもしれない。

考えるーーそんな男が利用するのはこんな目立つホテルではない。むしろ、入るのも拒まれるような薄汚いホテル。リナの外見に最もそぐわないホテル。

「おい」

「は、はい」

「この辺りで一番ボロいホテルは？」

鼻を押さえたまま優男は俯き、再びロウジに視線を戻した。

「ハイウェイ沿いの、ショッピングモールのすぐ近く……」

優男が言い切る前に、ロウジは外へ走り出した。

ショッピングモール。昼過ぎにはチープな衣料品をケチな商売人が売りさばいている。真夜中の今は全てのシャッターが閉まっていた。

優男の言った言葉で思い出した。ロウジも一度足を運んだ事のある薄汚いラブホテル。ショッピングモールを突っ切って路地を左に

曲がった所にある。

昔、そこで妻と寝た。初めて妻の中にぶちまけた場所。メロウの命が妻に宿った思い出のラブホテル。オウキと妻が逢い引きに使っていた呪わしきラブホテル。

ロウジが妻を殺した忌まわしきラブホテル。

ロウジはショッピングモールを走った。頭の片隅に閉じ込めていた記憶が蘇る。耐え難い吐き気に襲われる。

ロウジとオウキ。そして妻のレン。一番街の孤児院で共に育った。十二年前ーー十八の時に共に巣立った。

三人はウルフ・ロックを漂流して過ごした。弱者を守る法律の存在しない島。生きていく為には金かマフィアのコネが必要だった。孤児である三人にそんなものはありはしなかった。

ロウジとオウキは親友だった。ロウジとオウキはレンに惚れていた。ロウジとオウキはレンの為に何もかもを厭わなかった。

生きる為に盗み、生きる為に殺した。いつしかロウジとオウキはウルフ・ロック中のマフィアに狙われるようになった。厭わなかった。レンの為に、立ちふさがるマフィア達は一人残らずぶちのめしてきた。

ロウジとオウキ。二人はいつしかウルフ・ロック中のマフィアに畏怖を込めてこう呼ばれた。

狂狼の双生児。

二人を狙うマフィアは月日に比例して減っていった。レンを守りきった。生きる事に不自由しなくなった。

二十二の時、ロウジはレンに言い寄った。オウキが孤児院の様子を見に帰った。抜け駆けした。いつも頭の中で思い描いていた想像を実現出来る千載一遇のチャンスを逃すわけにはいかなかった。

二番街の薄汚いラブホテルーーロウジはレンを無理矢理連れ込んだ。がむしゃらに犯した。レンはロウジを嘲笑った。

『不器用な人』

ロウジはレンの言葉の意味する事が解らなかった。尋ねた。

『惚れたって事を性欲でしか示せないっていう意味よ』

レンはそれきり口を開かなかった。よがりもしなかった。無音の性交ーー射精した。

オウキが戻ってくる前に、ロウジはレンと籍を入れた。レンは抵抗しなかった。

オウキとの再会ーーロウジはオウキと目を合わす事が出来なかった。レンが代わりに口を開いた。

『私達、結婚したわ』

オウキは表情を変えずに言った。

『おめでとう』

ロウジとオウキは親友に戻った。しかしそれは、メロウが生まれるまでの、仮初めの友情に過ぎなかった。

メロウが生まれると、ロウジはメロウを連れて孤児院の院長に報告する為に里帰りした。難産で体力を失ったレンの面倒はオウキが快く引き受けた。

戻ってきた。ラブホテルから共に出てくるオウキとレンの姿を目撃した。ロウジは隠れた。一ヶ月後、ロウジはオウキの目を盗んでそのラブホテルに再びレンを連れ込んだ。

『オウキと寝たな？』

『えぇ、寝たわ』

『お前は俺の女だぞ？』

『私がいつ、あんたの女になったの？　あんたが勝手に私を犯して、籍を入れただけでしょう』

『お前も望んでたんだろう？』

『私は何も望んでないわ』

『俺を愛してるんだろう？』

『馬鹿言わないで』

『オウキが、好きだったのか』

レンはロウジを嘲笑った。

『私は誰も愛してない。生きる為にあんた達を利用しただけ。でも、セックスはオウキの方が上手かったわね』

ロウジの中で何かがはじけた。気がつくと、死体になったレンの空虚な瞳がロウジを見据えていた。

ロウジは膝に手をついて、肩で息をした。闇の記憶に必死で蓋をする。目の前にはリナがいるであろうラブホテルが建っていた。老朽化の進んだ外壁は所々にヒビが入っている。あの頃と全く変わっていない。

三階の窓に人影――レンだった。レンの亡霊がロウジをあの頃と同じ視線で嘲笑っていた。

『不器用な人』

吐き気――もはや我慢出来る領域ではなかった。吐いた。

最悪の気分。最悪のコンディション。これでは万一の時に満足に動けない。

ロウジは悩んだ。悩んだ末に、ガキ共から取り上げた暴狼剤を一粒飲んだ。レンの姿が消え、幻聴が消えた。

5、狂宴

しばらくの間ーーあくまでロウジにとってーー立ちすくんだ。幻聴が消え、徐々に精神が平静を取り戻していく。

クールダウン。何もかもが冷めきっていく。そしてーー。

頭の中が爆発した。視界が広がり、全ての感覚が冴え渡る。目を凝らせば、建造物を透視する事すら可能な気がした。

何かに悩んでいた気がしたーー忘れた。

何かを恐れていた気がしたーー忘れた。

何かを探している気がしたーーリエ。体臭野郎の糞売女。

愉快でたまらない。あの糞売女をぶちのめし、気が狂うほど犯してやるーー千載一遇の大チャンス。

ロウジは勃起し、瞬く間に射精した。想像だけで恐ろしい程の快感がもたらされている。不安も憂鬱も、何もかもが膨大な快楽に変えられているのがわかった。

恐らくは、恐怖さえも。

一歩踏み出すーー距離が跳ぶ。駐車場。あの売人のバイクが停めてあった。

一歩踏み出すーー視界が薄汚れたラブホテルのロビーに変わった。

受付には何もかもを諦めたような、くたびれた面持ちの老人が一人、呆けた顔をして座っていた。

「ライダースーツの男と赤いドレスの女は」

「……もめ事なら勘弁してくれ」

先刻までなら怒り狂っていただろう返答。今においては何の苛つきももたらさなかった。

「そうか。それじゃ自分で捜す」

ロウジは老人の顔面に右ストレートを叩き込んだ。文字通り、老人の顔面に穴が開いた。

意識が跳ぶ。力が漲っている。欲望が渦巻いている。全てが加速していく。

五階建てのホテルだった。客室は二階から各階に四部屋ずつ。

２０１号室――扉を蹴り破る。無人。二階は全て無人だった。意識が跳ぶ。

３０１号室――扉を蹴り破る。不細工な狼のガキ共がベッドの上でシックスナインをしていた。意識が跳ぶ。血まみれの死体が二つロウジの足下に転がっていた。意識が跳ぶ。

４０２号室――扉を蹴り破る。無人――違う。臭った。嗅覚が敏感になっている。精液の臭いと《牝》の臭い。臭いの残滓からイメージが迸る。バイク野郎とリナ。激しく絡み合っている。イメージ

の中でバイク野郎がロウジに変わる。リナの両脚を広げさせ、ペニスを思う存分ぶちこんでいる。想像と現実の境界が消え、快感がダイレクトにペニスに伝わった。ロウジは再び射精した。

臭いを嗅ぐ。リナとバイク野郎は近くにいる。乱れたままのベッドシーツにはリナが垂らした《シミ》がついている。

懐から振動ーー携帯がふるえていた。体臭野郎からの着信。体臭野郎ーー誰だそいつは？

ロウジは携帯を耳にあてがえた。頭に衝撃が走った。

「あれ？　倒れない」

振り向く。銀髪の優男が立っていた。ライダースーツを着ている。すなわちバイク野郎。その後ろにリナ。

「もしかして、キメてる？」

バイク野郎の右手ーー銃が握られていた。恐らくグリップで殴られた。

「あんたがロウジか。噂通りだね」

言葉は聞こえる。意味が捉えられない。ロウジがすべき事ーー《体臭野郎の為に、すなわちメロウの為にリナを救い出す》。

体臭野郎ーー誰だそいつは？

メロウーー……。

ロウジがすべき事ーーリナを犯す。立ちふさがる者をぶちのめす。

「とち狂ってる」

ロウジはバイク野郎に殴りかかった。拳が空を切る。カウンターの左フックに頬を叩かれる。痛みは感じない。

リナを見るーー蔑んでいる。ロウジを見下している。

呪いすら快感に変わる。憎悪すら快感に変えられる。全ては欲望と共にある。全ての欲望は現実として具体的に構築出来る。何も呪うことはない。何も憎むことはない。ロウジは笑った。声をあげて笑った。

バイク野郎の膝蹴りがロウジの腹を捉え、右肘が顎に入った。ベッドに仰向けに倒れた。バイク野郎はロウジに跨り、銃のグリップでロウジの頭を殴りつける。

「まだ、笑える？」

ロウジは笑った。バイク野郎も笑った。

「あんた、やっぱり本物だ。ゼウスも喜ぶよ」

勢いよく上体を起こし、そのまま頭突きをバイク野郎の顔面に叩き込んだ。バイク野郎が仰け反る。仰向けに床に転がる。ロウジは勢いをつけてベッドを跳んだ。両膝をバイク野郎の腹にぶち込んだ。

吐血ーー愉しい。愉しくてたまらない。バイク野郎をぶちのめす

ーー欲望は具体的に構築出来る。

リナを犯すーー欲望は具体的に構築出来る。何も恐れることはない。しかるべく、何も呪うことはない。何も憎むことはない。

リナは扉に後退っている。何かを叫んでいる。間違いなくロウジに恐怖している。

愉しい。愉しくてたまらない。

ロウジはリナに詰め寄った。リナの華奢な左腕を取り、引き寄せた。

「離しなよ、下衆野郎！」

リナはロウジの頬に唾を吐いた。愛おしさすら感じられた。リナの何もかもを愛せる気さえした。

「ヤクル！」

唇を唇で塞いだ。愛おしいリナの何もかもを吸い尽くしてしまいたいーー欲望は具体的に構築出来る。

乾いた音がした。脚に痺れーーバイク野郎が銃を撃った。

よろけながら立ち上がるバイク野郎ーー愛おしい。俺の欲望の形をした人形。俺にぶちのめされる為だけにある存在。愛おしい。愛おしくてたまらない。

身を翻し、バイク野郎に歩み寄った。血が絨毯に染み渡る。背後

でリナが嗚咽していた。

「これもだめか。《狂狼剤》の効果は抜群だね。もっとも、あんたみたいな男じゃなければ、ここまでの効果は得られないんだろうけど」

「ヤクル！　そいつを殺して！」

声が聞こえる。意味は捉えられない。

「待ちなよリナ。彼は必要なんだ。神狼にとって、ゼウスにとって、ひいては全ての狼達にとって、ね」

バイク野郎が両腕を広げた。思う存分ぶちのめせ――究極の愛の形。

「何が必要なのよ！　こいつ、この私の唇を……！」

「必要なんだ。彼みたいに、強くて、とち狂ってて、とびきり不器用な狼がね」

『不器用な人』

激しい頭痛がした。頭が引き裂かれるような痛み。息をする事すらままならない苦しみが津波のように押し寄せる。

「これだけ暴れたんだ。薬の効果はすぐに切れる」

「いいから殺して！」

ロウジは頭を押さえて悶えた。膝が折れる。言葉にならない叫びが喉の奥に響いた。

脚に激痛ーー先ほど撃たれた傷が遅れてロウジを蝕み始める。

気が狂いそうになる。

『不器用な人』

『落ち着けロウジ。お前と俺なら……』

『不器用な人』

「うるせぇ！」

ロウジは脚を引きずりながら、それでも頑なにバイク野郎にしがみついた。

「あんたに忠告しておくよ。《狂狼剤》は一日一錠までにしておくんだ。どうしても我慢出来なくなったら暴狼剤に手を出しな。それ以上やると、取り返しのつかない事になる。他の狼ならいざしらず、あんたに壊れられるのは困るからね」

冷や汗が滝のように流れる。体中に鳥肌が立つ。目が血走り、歯がカタカタと震えだした。

バイク野郎に胸倉を掴まれ、ベランダの窓の前まで引きずられた。

「また、会おう。狂狼の片割れ」

一本背追い――ガラスが砕け散り、ロウジは夜の闇を舞った。アスファルトの地面が、ロウジの背中を待ち構えていた。

意識が跳んだ。

6、いつからこうなった？

夢を見た。

愛くるしい表情のメロウが、ロウジとオウキの前で無邪気に走り回っている。メロウは二人をパパと呼んだ。ロウジがそう呼ばせた。メロウにはパパが二人いるんだーー。

オウキはロウジに呟いた。

『俺が憎いか？』

ロウジは曖昧に首を振った。

『いいや。お前は俺の親友だよ。ただ一人のな。お前こそ……』

レンの事を恨んでないのか？

『もう、忘れよう。あれは悪い夢だった』

幼いメロウを連れて、ロウジとオウキはウルフ・ロックを旅した。あるとき、オウキが言った。

『そろそろ、俺達にも決まった寝床が必要じゃないか？』

ロウジは頷いた。

『メロウの為にも、ここらで大きな博打にでよう』

『博打？』

『どこか、規模のデカいマフィアを潰して、俺達の家をつくるんだ』

『悪くないな』

ロウジは言った。メロウがロウジに駆け寄ってきた。

夢から覚めた。

目を開ける前から、途方もない倦怠感がロウジを襲った。汗が服と肌を密着させているのが判る。ろくでもないものが目の前に待ち構えている予感がした。

「お目覚めだな」

予感が当たった。

対面に全裸のバラスがいた。脚を開き、ペニス丸出しでソファーに深く腰掛けている。

ロウジは周囲を見回した。無音で広大なホール。ボーイが居心地悪そうに隅の方に何人か立っているのが見えた。

「聞かせてもらおうか。何が、どうなっちまったのかをな」

バラスの額に血管が浮き出ていた。顔は紅潮し、鼻の穴から今にも蒸気が噴き出すのではないかと錯覚するほど荒々しい息遣いをし

ている。

記憶を探るーーおぼろげ。全ての情景がもやに包まれている。

「どうした？　今すぐ喋らねえと娘の死骸がお前の前に転がるだけだぜ」

背筋に悪寒が走る。メロウ……。俺は失敗したーーもやに隠されていた情景が鮮やかに蘇る。頭痛がした。吐き気がした。

「あの、薄汚いラブホテルで何があった？」

ロウジは喋り出した。絶望に一歩ずつ近づいている気がした。

「……神狼。ゼウスの奴が絡んでるってか」

眉毛を吊り上げながらバラスは言った。ロウジはひとしきり喋り終わると、体力の限界を感じ、ゆっくりと目を閉じた。

「それで、お前はその売人にやられて、おめおめと眠りこけてやがったわけだ。リナがさらわれたってのにな……」

言い返す気力がない。力が出ない。ただ大量の汗が流れ落ちるだけだった。

「答えろロウジィ！！」

額の上で何かが弾けたーーバラスが思い切り投げつけたワイングラス。ロウジは目を見開いた。衝撃に遅れて痛みがやってくる。汗

に血が混じった。

ロウジは額を右手で押さえながら、バラスを睨んだ。

「よくそんな目が出来るなぁ。あぁ？　ロウジよお。娘をどうやって殺して欲しい？　手足を引きちぎって肛門に突っ込むか？　それとも俺のマラで喉を突き破ってやろうか」

想像ーーバラスにメロウが陵辱される。バラスにメロウが惨殺される。横たわる死体。空虚な瞳がロウジを見据える。

『不器用な人』

メロウとレンの声が重なる。破滅に拍車がかかる。全てが暗黒に飲み込まれいく。ロウジは嘔吐した。空っぽの腹から吐き出されるのは黄色い胃液だけだった。

「クズ野郎が。この上俺の城を薄汚いゲロで汚しやがって」

バラスは立ち上がり、ロウジの首を巨大な右手で掴んだ。そのまま持ち上げる。

「抵抗してみろ。そんな力も残ってないってか。今ならいけすかねぇお前も簡単に殺せるなぁ。どうするよ、ロウジ」

どうするーー逃げ仰せたい。この絶望の渦中から、行けども行けども終わる事のない無間地獄から。メロウの手をとってどこか誰も知らない土地へーー。

バラスの手に力が入る。ロウジの意識が薄れていく。

「狼星会のシノギの半分は暴狼剤の売り上げだ。糞ったれの神狼が何を考えてるのかは知らねぇが、このまま好き勝手やらせておくわけにもいかねぇ。ほったらかせば大打撃は必至だ。何よりリナがさらわれてる」

意識を繋ぎ止める。こんなところで死にたくない。下衆の体臭野郎に殺されたくはない。下衆の体臭野郎にメロウを殺されたくはない。

残された力を振り絞り、ロウジは両手でバラスの右腕を掴んだ。もがき、暴れる。

「前々から神狼は目障りだった。ここらでひとつ、戦争をおっぱじめるのもいいかもしれねぇ。確かに奴らはでけぇ。正面きったら俺達狼星会も不利は明白だ。だが……」

なおもロウジは暴れ続けた。宙に浮いたまま、バラスの顔面を蹴り上げようとする――脚が上がらない。撃たれた傷のダメージ。手当てもなしに癒えるわけがなかった。激痛が走る。生への執着が強くなる。

「神狼はゼウスのカリスマ一つで成り立ってるマフィアだ。つまりな、ロウジ。ゼウスさえ殺っちまえば後は恐れるに足りず、だ。解るか？　奴さえ殺れば、神狼の指揮系統は破綻。残りの雑魚は蜘蛛の子を潰すよりも簡単ってわけだ」

バラスを殺せ――オウキの声が聞こえた。

『バラスを殺して、狼星会を手に入れよう。そうすれば、俺達は

安泰だ』

バラスを殺せ——目が血走る。脳みそが沸騰する。

「ロウジ。てめぇに最後のチャンスをやる。リナを救い出せ。ゼウスを殺せ。そうすれば後の段取りは俺がつけてやる。解るよな？　ゼウスを殺せ。リナを救い出してゼウスを殺るんだ。そうしたら、お前と娘を解放してやる。お前には選択肢はねぇはずだが、一応聞くぞ？　イエスか、ノーだ。どっちだ？」

バラスを殺せ——この言葉はお為ごかしに過ぎない。操り人形のままでいれば、結局のところ最後まで体よく利用されるだけだ。

バラスを殺せ——今はその時ではない。ひとまずバラスの要求を飲め。これはチャンスだ。神狼を上手く利用しろ。そうすればメロウを救い出せるかもしれない。

「……エス」

「あぁ？」

「イエス」

バラスはロウジの首を離した。ロウジは腰を床に打った。

「まずは情報収集だ。明日からは眠れねぇと思えよ。部下を二人つけてやるから好きに使え。それから、お前が例のガキから取り上げた暴狼剤——売人が狂狼剤と呼んでいたやつ——をよこせ。何かの手がかりになるかもしれねぇからな」

巨大な足音が遠ざかっていく。バラスの醜悪な背中がホールの彼方で小さくなり、やがて消えた。

ロウジは脚を引きずりながら、ソファーにしがみつくようにして息遣いを正した。ボーイの一人が駆け寄って、青ざめた表情でロウジに狂狼剤を要求した。

このボーイをぶちのめして憂さを晴らすーーそんな体力は残っていない。

悩んだ末、残り九粒の狂狼剤のうち四粒をボーイに渡した。これが必ず必要になるーー予感めいた確信があった。

「糞ったれ」

ロウジは呟いた。

「いつからこうなった？」

誰にともなく尋ねる。いつからこうなった？　いつから俺の人生は糞にまみれ始めたんだーー。

レンの死に顔が脳裏に浮かぶ。ホールに灯っていた僅かな明かりが消えると、ロウジは広大な暗闇に包まれて眠った。レンの死に顔は、夢においても消える事はなかった。

7、狂追美

おぞましい。おぞましくてたまらないーー。

リナは唇を拭った。幾度も幾度も、十分すぎるほどに水道水を両手にすくい、幾度も幾度も丹念に唇を洗う。それを繰り返した。おぞましさが拭える事はなかった。

洗面所ーー金色の縁取りの鏡台。鏡に映った自分を眺める。美しい。だが、何かが足りない。

ロウジの唇の感触が脳裏をよぎる。おぞましさが爆発する。ロウジに美しさを吸収されたーー抑えがたい怒りがこみ上げる。無意識に引きつっている自分がいた。

あの下衆野郎を殺さなければならない。あの下衆野郎が私から奪った美しさを回収しなければならない。リナは決意を固めた。

洗面所を出る。豪華な景色が目の前に広がる。

最高級の羽毛を使ったセミダブルのベッド。室内を常に適温に保つ最新のエアコン。余分にすら思えるが、部屋の隅々に置かれた邪魔にならない大きさの空気清浄機。そして、高級な狼の為にーーつまりはリナの為にーー部屋を照らす豪勢なシャンデリア。

いくらか気分が紛れる。リナはベッドに腰掛け、窓の外を眺めた。

新緑の木立が萌えている森。夕焼けに照らされている。ここに着いたのは今朝だった。二番街からハイウェイをヤクルのバイクで走

り、六番街で降りた。そこから神狼の構成員が運転するジープに乗り込み、この森の中、ゼウスの別荘にたどり着いた。

別荘――外観はログハウスを模していた。だが内装は高級ホテル――例えるならエデン――を凌駕して豪勢なつくりだった。

『当面、リナにはここにいてもらうよ』

着いた矢先、ヤクルはそう言ってどこかへ出かけていった。

憎らしいほどに爽やかな笑み。憎らしいがしかし憎めない美しい笑み。ヤクルの事を考える。気分はさらに紛れる。性器が濡れる。

リナはベッドに寝転がり、両脚を開いた。中指を性器へ。イメージの中でヤクルのペニスがリナの中へ入ってゆく。

体がくねる。ため息に似た喘ぎが漏れる。悶える。中指を掻き回す。イメージの中でヤクルが思い切り腰を振った。

喘ぎが叫びに変わる。リナは絶頂した。

夢を見る――リナは夢の中で幼女だった。目の前には、老朽化が進む穴だらけの家屋が建ち並んでいる。家屋というよりは小屋の方が近かった。土が剥き出しの地面には、ボロを纏った薄汚いやせ細った狼達が何もかもを諦めた表情で座っている。

一番街――スラム街の記憶。リナの故郷の記憶だった。

リナは家に足を運ぶ。蠅だらけ、六畳に満たないリビング。風呂

はなく、トイレも外に地面を掘った仮設のものしか使用できない劣悪な環境。

物心ついた頃、すでに父親はいなかった。母の話によれば、他に女をつくって逃げたらしい。

母はリナの目から見ても美しかった。なぜ、お父さんはこんな綺麗なお母さんを捨ててどこかへ行ってしまったんだろう？　リナは幼ながら、それが不思議で仕方なかった。

母に尋ねる。母は悲しそうに首を振る。

『ごめんね』

そして、リナを抱きしめる。

今にして思えば、あの頃の母は凄まじいまでの体臭をはなっていたはずなのに、なぜ私は平気で抱きしめられていたのだろう？

夢のリナの内なる意識が、ふとそんな事に気付く。

何が『ごめんね』なのだろう？

夜がふける。リナの小屋に薄汚い狼の爺がやってくる。

『リナ』

『わかってる』

夜になるとリナは小屋を出される。小屋の前で両膝を抱えながら、

リナは爺が出てくるのを待っている。普段は聞く事のない、母の艶めかしい声が小屋から聞こえてくる。

やがて、爺が出て来る。

『いいねぇ。ママが綺麗で。ちょっと臭くてもよく締まるんだよお前のママは。それに安い。俺なんかでも買える娼婦がいるなんて、ここは本当にいい町だ』

リナは頭を撫でられる。爺を睨みつける。

夢から覚める。

体中にぐっしょり汗をかいている。なんで今になってこんな夢を？　リナは上体を起こし、頭を両手で押さえた。

幼女の頃の記憶ーー過酷なスラム街での生活。思い出したくもない数多くの受難。夢は受難に辿り着く前に終わったが、現実で記憶が奔走しているのだから意味はなかった。

外を見やる。すっかりと日は暮れ、辺りは静寂の闇に支配されていた。窓にリナの顔が映るーーやつれている。美しさが削ぎ落とされていく。

リナは両頬を叩いた。

「冗談じゃないわ」

思わずひとりごちた。冗談じゃない。あのクズで糞の下衆野郎のロウジに唇を奪われてからというもの、何もかもが上手くいかなく

なっている気がする。このまま放っておけば、美しさだけでなく、リナに用意されているはずの幸福で贅沢三昧の未来すらロウジに奪われてしまうのではないだろうか。

「冗談じゃないわ！」

リナは枕を窓に映る自分の幻影に投げつけた。

早急にあの下衆野郎の息の根を止めなくちゃ。あの下衆野郎が私から奪ったもの全てを取り戻さなくっちゃ。

リナは携帯を手にとった。ヤクルには禁止されていたが、構うものか。

メモリーからロウジを探す。下衆野郎2という名前で登録されていた。ちなみに1はバラスだった。

電話をかけるーー留守電。舌打ち。メッセージを吹き込む。

「必ず殺してやるから。お前みたいな不細工でクズでみすぼらしい下衆野郎が私の唇を奪った罪がどれだけ重いか思い知るといいわ」

電話を切る。次はヤクル。こちらは三コールで繋がった。

「もしもし」

「ヤクル？　いつ帰ってくるのよ！」

「あぁ、今そっちに向かってるよ。ゼウスも一緒に」

ゼウスーー強烈な言霊。ゼウスを使えばロウジを殺す事など容易い。ゼウスに取り入ればウルフ・ロックの半分を手にする事が出来る。ヤクルを飼い犬に出来る。

目が眩むほどの欲望。リナはしばらく恍惚としていた。

「リナ？」

「……なんでもないわ。それより、私待つの嫌いなの。さっさと戻ってこないと、あんたのアソコ噛みちぎるから」

電話口の向こうーー高らかな笑い声が聞こえた。

「帰ったら存分に可愛いがってあげるよ」

通話が切れた。

普段なら、こんな風に一方的に通話を切られたら怒り狂うのが常だった。どうかしてるとリナは思った。

ヤクルの方が私より美しいから？　ヤクルの方が私より聡明だから？　だから私はヤクルに抗えないとでもいうの？

畜生ーー悔しさが込み上げる。性器が再び濡れていく。

違うーーロウジに美しさを吸われたから。本来の私に戻れば、ヤクルだって絶対私の忠犬になる。私はリナ。全ての男を屈伏させる魔性の魅力を持つ女ーー。

『リナが一番綺麗。いつか必ず、あなたは見たこともない素敵なドレスを着て、見たこともない豪華なお家に住んで、見たこともない美しい狼（ひと）のお嫁さんになるの。私が保証するわ』

母の声が聞こえた。

「うるせぇ、糞売女」

リナは吐き捨てるように呟いた。シャワーを浴びて、性器を丹念に洗い、ヤクルとゼウスを待った。『ーー可愛いがってあげるよーー』。ヤクルの囁きが幻聴となって聞こえてきた。リナは三度濡れた。もう一度洗うのは億劫だった。

8、ボヤジとスン

「必ず殺してやるからーー」

ロウジは耳に携帯電話をあてがえたまま、しばし怒りに震えた。リナからの留守録。眠りこけていた自分が呪わしい。こんなふざけたメッセージを残したリナが憎たらしい。

右脚の激痛は収まるどころか、さらに強さを増していた。消毒液と包帯ーーおざなりの治療。そんなもので回復が望めるはずもなかった。

空はそんなロウジを嘲笑うかのように快晴だった。駐車場。右手にはドーム型のクラブ、パラダイスの白い外壁が見える。松葉杖で体を支えながら、ロウジはバラスがよこすといった二人の部下を待っていた。

考えるーーリナの居場所。携帯の電波が届く範囲内。当然の事ながらウルフ・ロックのどこか。地下ではない。

考えるーーリナを連れ去ったのは神狼の売人。ヤクルと、リナはそいつの事を呼んでいた。

考えるーー神狼のテリトリーは六~十番街。奴らがバイクだけで移動したとなると、時間的に六、もしくは七番街までが限界。

恐らくは、そのどちらかにリナはいる。しかし、限定されたとはいえ、まだまだ範囲は広い。それに、今から向かったところで、かなりの時間をくう。その間に奴らが移動しない保証はまったくない。

歯軋りーー苛立ちを抑えたい。何か、気分を健やかにするものが欲しい。

ロウジは懐に手を入れた。暴狼剤ーーヤクルは狂狼剤と呼んでいた。凄まじい効果。恐ろしいまでの快感を得る事の出来る魔法の薬。一粒飲めば痛みを吹き飛ばし、呪いすら愛情に変えられる。

だが、《切れた》時の苦しみは地獄だった。両刃の剣。ロウジは悩み、そして懐から手を出した。

駐車場の入口に、二人の男が見えた。片方はでくの坊。もう片方はチビ。

でくの坊ーーボヤジ。腕っ節の強さだけが取り柄の筋肉馬鹿。身長はバラスとほぼ同等。筋肉のみを愛し、筋肉のみに忠誠を誓う大馬鹿野郎。いかめしい面。服装は必ずタンクトップにハーフパンツ。大男に似つかわしくない格好だといつもバラスにからかわれているが、筋肉を誇示する為に本人はやめる気がない。

チビーースン。華奢な体付き。糸目に出っ歯。いつもリナに不細工と罵られていた。頭は狼星会でもキレる方にあたる。性格は残忍なサイコ野郎。ナイフを使わせたら右に出る者はいない。バラスの目を盗み、リナのヌードを盗撮し、その写真を切り刻んでマスを掻いている場面をロウジは二回目の当たりにしている。

「体臭野郎が。クズしかよこさねぇ」

ロウジは舌打ちした。ボヤジが足早にロウジの元まで歩いてきた。頭を下げる。

「大兄（たいけい）、お世話になります」

大兄——狼星会において目上の狼はこう呼ばれる。ロウジの狼星会におけるポジションは単なるチンピラに過ぎない。狼星会を一度壊滅寸前にまで追い込んだ男を、バラスが幹部として招待するはずもなかった。しかし、筋肉馬鹿のボヤジは、たった二人で当時の狼星会の構成員半分（二百人前後）を皆殺したロウジを尊敬していた。

「おう。頼むぞボヤジ」

言外の意味——弾避けくらいにはなれよ。

「脚は、大丈夫ですか？」

「大丈夫に見えるか？　痛くて気が狂いそうだ」

「大兄をこんな目に合わせたその糞狼、俺が必ずぶち殺してやりますよ」

ボヤジの鼻息が荒くなる。ロウジはため息をついた。ボヤジの巨躯に隠れて、後ろからスンが顔を覗かせた。

「ロウジさん。こんにちは」

「おう」

「行きましょうか。狼星（ろうせい）は気の短い方です」

狼星——バラス。狼の星。輝ける狼の意。狼星会の頂点の称号。

あまりのミスマッチに、笑うのを通り越して腹が立つ。

あらかじめ用意してあった狼星会の車――黒のワゴン――に乗る。ボヤジが運転。スンが助手席。ロウジは後部座席に寝そべった。

「どこへ？」

ボヤジが言った。どこへ？　知った事か。

「とりあえず適当に走らせろ。その間に考える」

「了解です、大兄」

エンジンがかかる。駐車場を出て、パラダイスを横目に二番街セントラル・ストリートへ。デパートやブティックが建ち並んでいる。今日は休日だった。そこかしこに家族連れやデート中の狼が歩いている。

ロウジは無駄と知りつつ、リナの携帯に電話をかけた。圏外。意図的に電源を切っている――待てよ？

そういえば、リナにはなぜあんなくだらない電話をする余裕があったんだ？　さらわれたのなら、場所を伝えるなりなんなりと他にいくらでも言う事はあるだろう。

しかも、メッセージには『私の唇を奪った罪は重い』とある。もし、ロウジがリナの唇を《吸った》事がバラスに伝わったら、今度こそバラスはロウジを許さないだろう。つまり、このメッセージがバラスに届く事がないという前提の上でリナはロウジを罵っている。

そもそも、電話をかける余裕があるなら何故バラスではなく俺なんだーー記憶を辿る。

ロウジが狂狼剤のトリップでいかれていたあの時、リナの唇を吸った直後ーー。

『ヤクル、そいつを殺して！』

そう。リナは確かにそう言った。本来なら、いくら取り乱したとはいえ、自分を助けにきた（ロウジはリナを犯すつもりであったにせよ）ロウジを殺す、という選択肢はあまりに自虐的でありすぎはしないだろうか。自虐的ーーリナにこれほどそぐわない言葉はない。

推測1ーーリナは体臭野郎に見切りをつけ、神狼に寝返った。

推測2ーーあるいは、初めからリナは神狼の犬だった。

どちらにせよ、リナが神狼側についているという線は濃厚。だとすれば、連絡が取れたところでどうしようもない。

「スン」

「何です？」

「もしもだぞ？　もしもリナさんが、バラス狼星を裏切っていたとしたら、どうする？」

スンは後部座席に振り向いた。

「どういう事です？」

ロウジはいましがた自分が閃いた推測を話した。振動。ボヤジが急にブレーキを踏んだ。

「どうした！？」

「い、いや、リナさんが、そんな……」

筋肉馬鹿のボヤジーーわかりやすく動揺している。ボヤジはリナに惚れていた。リナから聞いた事がある。いつもあたしをいやらしい目で見てやがるのよ、あのデク。

バラスの目を盗んで、リナはボヤジを呼び出した。気持ちいい事してあげるーーセックスではなかった。リナはボヤジの両手をベッドに縛り付け、蝋を垂らし、鞭で体をなぶり、ハイヒールでペニスを踏みにじった。

『あいつ、ドエムなのよ。鞭で叩かれて勃起するの。私のストレス発散に、たまに遊んでやってるわ』

後続車からのクラクション。道路のど真ん中。休日のセントラル・ストリートは渋滞だった。この急ブレーキで事故にならなかったのが奇跡だった。

「あの狼(ひと)なら、やりかねませんね」

再び前を向いてスンが静かに言った。

「狼星には？」

「まだ言ってない。確証がないし、何より狼星はリナさんの事になると目の色を変える。怒鳴り返されるか、下手をすればぶちのめされる」

「確かに」

クラクションの感覚が短くなる。サイドミラーには、後続車からガタイのいいアロハシャツを着た男が運転席を乱暴に降り立った様が映し出されている。

「大兄、リナさんに限って……」

「現実を見ろよ、ボヤジ。確かに物証はないが、状況証拠が揃いすぎてる」

「大兄……」

助手席側のサイドウインドをアロハ野郎が拳で叩いてきた。何かがなり散らしているが、車内には届かない。

「ロウジさん。私は、狼星を尊敬しています」

「あぁ」

「狼星を裏切るような狼は切り刻みます。例え、それで狼星の怒りを買う事があっても」

天啓ーーロウジの頭の中に降りてきた。

リナに手をつけた事がバレれば、確実にメロウはバラスに殺され

る。なにかとやかく理由をつけていやがるが、スンがリナに殺意を抱いていたのは明白だった。スンにリナを殺させろーー少なくとも、メロウの身柄を確保するまでは、リナの存在は今やロウジにとって邪魔でしかなかった。

神狼からリナを奪い返し、スンに殺させる。サイコ野郎もたまには役に立つ。ロウジは笑った。

「スン……、リナさんはそんな人ではない」

スンがリナを殺すーーバラスが怒り狂う。ボヤジにスンを殺させる。そうすれば面目は保てる。もちろん、その前に神狼を利用する事が出来れば、メロウを救い出す事が出来ればこの計画は机上の空論で構わない。しかしーー。

昨日までの絶望に僅かでも光明が見いだせた事で、ロウジの精神は安定した。

「とにかく」

ロウジは言った。

「そういう可能性が高いって事を肝に銘じとけ。リナさんが神狼側についたのなら、奪い返すのはかなり厄介になる」

本題ーーリナはどこにいる？　神狼達は何を企んでいる？

耳障りな音ーーアロハ野郎が飽きもせずサイドウインドを叩いていた。

「スン」

「えぇ」

スンはサイドウインドを半分開けた。スンの右手ーー折りたたみナイフが握られている。憐れなアロハ野郎は気付く様子もなくスンに怒鳴り散らしている。

スンの右手が素早く左に動く。サイドウインドが閉まった。目にも止まらぬスピード。アロハ野郎の喉がぱっくり切り裂かれていた。

「窓に血がつかないうちに出せ、ボヤジ」

「はい、大兄」

ボヤジはアクセルを踏んだ。サイドミラーに、道路の真ん中に倒れたアロハ野郎が首から血溜まりを作っているのが見えた。

9、一触即発

腹ごしらえーーファーストフード店のドライブスルー。ロウジはハンバーガーを二つにコーラ。スンはポテト。ボヤジは何も頼まなかった。

「食える時に食わないと、いざって時に力が出ないぞ、ボヤジ」

ファーストフード店の近く、大型デパートの裏路地に車を止めて、ロウジ達は昼食をとった。

「ジャンクフードは筋肉を衰えさせます」

「……そんなにリナさんの事がショックか？」

心中でボヤジに嘲笑を浴びせながらロウジは言った。ボヤジは何も答えず、運転席を降りた。

「ロウジさん、あまりボヤジをからかわないでください」

「心配してるんだよ」

「そんな事より、ロウジさんには考える事があるはずです」

考える事ーーリナの居場所。言われなくてもわかっていた。口うるさいサイコ野郎が。ロウジはコーラを一息で啜った。

「何か、ヒントになるようなものはないんですか？」

ヒントーーリナの留守録。煮えたぎった怒りを抑えて耳を澄ましたものの、リナの罵声以外には何も聞こえず、場所を特定するには至らない。もちろん、リナからの留守録の事はボヤジとスンには伝えていなかった。あの内容をバラスに漏らす訳にはいかない。

「お前の意見を聞かせてくれよ、スン。何かいい方法はないか？」

スンは助手席でポテトを頬張りながら、フロントガラス越しに外を眺めていた。

路地の先ーー大通りはデパートやらブティックやらの買い物客で賑わっている。

「はっきり言って、現状でリナさんを捜すのは不可能ですね」

完全否定ーー健やかになった気分が再び暗雲に侵される。このサイコ野郎をぶちのめしたい。ロウジは空になったコーラのパックを握り潰した。

「だったら、向こうからこちらにコンタクトをとらせればいいいんです」

「向こうから？」

「神狼の企みは我々の知る由ではありませんが、少なくとも例の、狂狼剤でしたか、あれが絡んでいるのは明白です。あれはそこら辺のガキにばらまかれています」

スンの言わんとする事ーーいまいち理解出来ない。

「ガキというのは馬鹿だからガキなんですよ、ロウジさん。狼星会からは一応、うち以外の売人がさばく暴狼剤に手は出すなというお達しを、規模のデカいストリートギャングには伝えていますが、馬鹿は死ぬまで馬鹿のままだ。あの安価じゃ結局のところ聞く耳持たずでまた手を出すでしょう」

「それで？」

「神狼程の組織です。使っている売人が一人のはずありません」

スンの言わんとする事ーーおおよそ理解出来た。つまり、二番街で狂狼剤に手を出した馬鹿ガキを締め上げ、ヤクル以外の売人の情報を聞き出す。そしてその売人をさらい、人質にとって神狼を呼び出す。

「ーーって事だな？」

「概ね、そうです」

「だが、神狼が売人一人の為に俺達にコンタクトをとってくると思うか？」

「やってみなければわからないし、現状我々に他の手段はないと思いますが」

現状現状とうるさい野郎だ。あわよくばボヤジにケツを掘らしてやる。だが、確かにスンの言うとおりだった。当面は出来る事を一つずつこなしていくしかない。

「幸い、ここは街の中心部です。馬鹿ガキを捜すのはそれほど困

難じゃないでしょう」

「俺はこの脚だ。捜すのはお前とボヤジに任せる。見つけたらここに連れてこい。俺がたんまりと吐かせてやる」

ロウジは笑った。憂さ晴らしには丁度いい。馬鹿ガキの一人や二人、最悪殺しても問題ないだろう。

高らかに笑うーー笑うのをやめる。スンがこちらに振り返り、ロウジを睨みつけていた。

「一応、はっきりさせておきますが」

「なんだ？」

「狼星があなたのサポートを命じたから、私はあなたの命令を聞きます。ですが、本来ならば私の狼星会におけるポジションはあなたより上だ。口の聞き方に気をつけて欲しいですね」

こめかみが震える。憤りが堪えがたくなる。頭痛がした。目眩がした。

「俺に喧嘩を売ってんのか、スン」

「買いますか？　その脚じゃろくに動けもしない。なんなら、アキレス腱も切り裂いてあげますよ」

堪えがたい憤りーー堪えられるはずがない。こんなものを体に入れっぱなしにしておけばあっという間に気が狂う。頭痛が激しくなる。目眩が激しくなる。

「上等だチビ。後悔させてやるよ」

「そっくり返します。哀れな飼い犬野郎が」

堪えがたい憤り――弾けた。松葉杖をスンの右目めがけて突き刺す。かわされる。ロウジの右目に閃光のようなものがちらつく――スンのナイフ。上体を左にそらす。顔にかすり、ナイフは後部座席に突き刺さった。

「表でろ糞チビ！」

「待ってください！」

ロウジとスンは運転席に目を向けた。ボヤジが青ざめた表情で外からこちらを伺っていた。

「何やってるんですか、大兄も、スンも」

ボヤジは運転席に乗り込み、馬鹿デカい上半身を二人の間にねじ込ませ、仲裁を計った。

「このチビが随分と調子こいていやがるから、判らせてやろうと思っただけだ」

「私も同じだよボヤジ。チビの部分が飼い犬に変わる以外はね」

右脚の事を忘れて助手席に飛びかかろうとした。ボヤジが体を張って止めた。

「落ち着いてください、大兄。スンも、言い過ぎだ」

このサイコ野郎をぶちのめせーーロウジの声が頭の中で自分自身に命令した。

落ち着けーーオウキの声がそれに覆い被さるように聞こえた。

落ち着けロウジ。今争ってもロクな事にならない。

「あぁ。わかってるさオウキ。わかってるから、黙っててくれ」

「大兄？」

怒りが悪寒に変わる。憎悪の炎が鳥肌に変わる。ロウジは深呼吸して後部座席に背中を預けた。

「今回は許してやるよ、スン。次はないぜ。覚えておくんだな」

スンは答えなかった。オウキの声が耳にこだましている。落ち着け、落ち着け、落ち着けーー。

狂いそうだった。狂狼剤が飲みたい。何もかもを忘れ去ってしまいたい。

『パパ』

メロウの声ーー忘れるわけにはいかない。メロウだけは救い出さなければならない。

胸に手をあてた。気張れ、ロウジーー自分自身に言い聞かせる。

「割れても仕方ない。すまなかったな、スン」

吐き気のする言葉。だが、怒りに任せてチームワークを乱すのは得策ではない。いつでも、ロウジは後になって後悔する。後悔してきた。

「……私も少々大人気なかったですね。すみません。ロウジさん」

こちらを見ずにスンが答えた。あぁ、今は許してやる。だが、今だけだ。お前も体臭野郎も糞売女のリナも、必ず俺が皆殺しにしてやるよーー。

「ところでボヤジ。お前、何してたんだ？」

「外で筋トレです」

「汗臭ぇからこれからは控えろ」

「すみません、大兄」

「スン、ボヤジにさっきの話、説明してやってくれ」

スンは簡潔にボヤジに段取りを説明した。それから十分後、二人は馬鹿ガキを捜しに街に繰り出していった。

１０、モンスター

ボヤジとスンを待つーーその間にもう一度リナの留守録に耳を傾けた。

「必ず殺してやるから。お前みたいな不細工で屑で糞の下衆野郎が私の唇を奪った罪がどれほど重いか思い知るといいわ」

やはり焦っている様子はない。淡々と呪詛を吐いている。

ロウジは再びリナに電話した。圏外。もう一度ーー圏外。

「やれるものならやってみやがれ」

ぼやく。ぼやく事しか出来なかった。

ボヤジとスンを待つーー二十分が過ぎ、三十分が過ぎた。

苛立つーー使えない屑ども。馬鹿ガキの一匹や二匹を捕まえるのにどれだけの時間をかけるつもりだ？

蒸し暑い。ロウジは外の空気を吸おうと、ドアに手をかけた。その時、ボヤジが大通りからこちらに走ってくるのが見えた。

「大兄！」

ドアを開けた。

「どうした？」

ボヤジーは唇を切っていた。右目の下が腫れていた。

「よく、わかりません！」

「あぁ？」

何をほざいているんだ、この筋肉馬鹿は。ロウジは舌打ちした。

悲鳴が聞こえる。デパートの方からだった。

「一体、何があったんだ？　スンは？」

「ガキを、追いました。あのデパートの中です。俺達、とにかく目がイッてるガキを捜しました。大通り沿いにある公園でそんな感じのガキ二人を見つけたんです。狂狼剤の事を問い詰めたんですが、あいつらいきなり俺に殴りかかってきやがって」

「ガキにやられたのか？」

「……ただのガキじゃありません。もの凄い力でした。それに、テンパり方が普通のジャンキーじゃないんです。なんていうか、あれは」

ボヤジがどもる。ロウジは車を降りて松葉杖をついた。

「狂っていました」

「ガキのなりは？」

「二人とも赤いシャツにダボダボのジーンズです」

どこの馬鹿ガキも同じようななりをしてやがる。見つけるのは容易い。

「ガリガリ、か。それでお前に傷を負わせるんだ。確かに狂ってやがる」

狂った狼——かつてはロウジもそう呼ばれた。だが、狂い方が違う。何か、尋常ならざる力が働いている気がした。

懐の狂狼剤に服越しに触れた。こいつが、ガキどもを狂わせている。バラスを、二番街を追いつめている。

「楽しくなってきやがったな」

「え？」

「追うぞボヤジ。肩を貸せ」

急ぐ——デパートの正面エントランスへ。狼(ひと)だかり。すでに野次馬が沸いていた。中が見えない。

「たかがガキが二人とスンが入っただけでどうしてこんな沸きやがる？」

野次馬の最後尾——軽そうな茶髪野郎に声をかけた。

「中で何があったか知ってるか？」

「いや、マジ半端ねぇっすよ、いきなり変な坊主二人が入ってきたと思ったら、店員の首筋に噛みついて店員死亡、みたいな？　超半端ねぇっすよ」

面倒な事になる。いくらウルフ・ロックとはいえ、白昼堂々、こんな騒ぎが起きれば糞ったれのガーディアンウルフどもが大挙して押し寄せる。

ガーディアンウルフ——ようは警察。建て前はウルフ・ロックの治安を守る為に結成された自治体。実体は三番街のマフィア、マルコ・ファミリーの下部組織。奴らを黙らせるのには金がいる。

「急ぐぞ、ボヤジ。野次馬をどかせろ」

ボヤジは頷くと、野次馬の群れの中心に走り出した。体当たり。ボヤジの体重に負けた野次馬は次々と倒れ、踏みにじられる。野次馬の中心に倒れた狼の通路が出来た。ボヤジは正面エントランスの前でにっこり笑った。

「どうぞ、大兄」

ロウジもまた、倒れた狼達を踏みにじり、エントランスの前に移動した。

自動ドアからデパート内へ。一階は衣料品コーナー。スーツやらブランドの鞄やらがそこかしこに散らばっていた。ショーケースは割れ、ガラス片が床にまっている。ガラス片の上には喉を食いちぎられた店員の死体が転がっていた——若い女だった。

「見ろよボヤジ、一噛みだ。一噛みで殺られてやがる」
ロウジは死体を見下ろした。なかなかの美人ーー勃起する。暴力的な衝動がロウジの中に駆け巡る。
俺もぶちのめしたい。バラスを、リナを、俺の人生に立ちふさがる全ての糞野郎どもをこんな風にめちゃくちゃに殺してやりたい。
「スンの携帯にかけろ」
ボヤジは携帯を取り出した。巨躯のボヤジが携帯を握ると、それは玩具の電話にしか見えない。
「もしもし、スンか。今、どこに……え？」
ボヤジがロウジに視線を移した。
「大兄、スンです」
なかば奪いとるようにロウジはボヤジの携帯を受け取った。
「スンか、今どこだ」
「三階です。だが、ロウジさん、出直した方がいいかもしれない」
通話口の向こうーー幾多の阿鼻叫喚が聞こえた。恐らくは逃げ遅れた一般の狼達。狂ったガキに襲われている。
「私とボヤジが二人がかりでも、奴らを相手にするのは骨が折れそうです」

「たかがガキだろう？　らしくないぜ、スン」

「奴らはガキなんかじゃない。奴らは……」

通話が切れた――何が起こっている？

「大兄、スンは？」

「わからん。だが、あんまりくつろいでる時間はなさそうだ」

スンに死なれては困る。奴には最悪の場合、リナを殺してもらわなければならない。

「三階だ。行くぞ」

松葉杖がもどかしい。正面エントランスから真っ直ぐ。様々なブランドのブースを突っ切り左へ。エレベーターが二基。その横に非常階段があった。

「どっちで？」

「階段を使おう。俺をおぶれ、ボヤジ」

ボヤジにおぶさり、ロウジは三階へ向かった。悲鳴はもう聞こえない。三階は家電コーナー。いくつもの液晶テレビが倒れ、ディスプレイの破片が散らばっていた。そんな事はどうでもよかった。三階は血の海だった。

「これは、ひどい」

ボヤジが呟いた。デカいなりのくせして、肝っ玉は小さい。筋肉馬鹿のチキン。本当に弾避けにしか使えなさそうだ。

いくつもの死体が無造作に転がっていた。ある者は両脚を失い、またある者は頭がまるまる損なわれていた。

「とんでもねぇ殺人マシーンだな」

狂狼剤のもたらす効果。これが、その結果だとすれば、狂狼剤とは単なる麻薬たりえない。

神狼は、こんなものをばらまいて、一体何をしでかすつもりだ?

神経を研ぎ澄ますーー何かが動いている気配はない。何かが息を潜めている気配もない。

「スンを捜すぞ。ボヤジ、お前は右廻り、俺は左廻りだ」

妨げになる死体を松葉杖でどかしながら、ロウジは家電コーナーを廻った。左隅ーー洗濯機コーナー。血塗られている。そのまま真っ直ぐ歩いた。突き当たりを右へ。三段の棚に様々な種類の電子レンジが置かれている。

ここは血塗られておらず、狼の死体もなかった。スンはこの辺りで様子を伺っていたに違いない。ロウジは目を凝らしながら歩いた。

棚と棚の間、見覚えのある出っ歯が白目をむいて倒れていたーースンだった。

心臓に手を当てるーー生きている。気を失っているだけだ。

ロウジはボヤジを呼び、スンを揺さぶった。

スンの目が覚めた。

目の焦点が合わないスンを液晶テレビコーナー、客がテレビを眺める為に設置された木製のロングチェアに座らせ、しばらく待った。スンは何回も首を振り、頬を叩いた。深呼吸ーー目の焦点が合ってくる。

「失礼。もう大丈夫です」

「何があったのか聞かせてくれ。最初からな。ボヤジじゃいまいち舌足らずだ」

ロウジの脇でボヤジが頭を掻いた。

「……私とボヤジは大通り沿いの公園に向かい、そこでベンチに腰掛けたまま涎を垂らしている二人のガキを見つけました。そいつらの視線は虚ろで、間違いなくジャンキーと踏んだんです」

「で、とりあえず声をかけた訳だ」

「えぇ。ガキ相手に前置きもいらないと思いましてね。単刀直入に尋ねたんですよ。『お前たち、狂狼剤をやってるのか』ってね」

「そしたら奴ら、急に俺に殴りかかってきまして……」

ロウジはボヤジの脇腹を小突いた。少し黙ってろーー。

「そう。私が狂狼剤と言った瞬間、奴らの目の色が変わりましてね。一瞬でした。気がついたらボヤジが倒れていたんです」

「見えなかったのか？」

「……えぇ」

相手は予想以上の強さだった。超高速でナイフを操るスンの目にすら止まらない程の拳打。明らかに常軌を逸している。

その後、奴らを追ってスンはデパートへ。ボヤジはロウジを呼びにきた。

「三階(ここ)で、何を見た？」

「虐殺ですよ。それもただの虐殺じゃない。さすがの私も呆気にとられました。奴らが客や店員達を、どんな風に殺したと思います？」

想像もつかなかった。武器もとらず、両脚を切り取り、頭を吹き飛ばす。……？　そういえば、切られた脚はどこにいった？　吹き飛ばされた頭はどこにいった？　スンを捜している時に、そんなものはどこにも見当たらなかった。

「食ったんですよ。しかも一瞬で」

「食っただと？　馬鹿な。ガキだぞ？　どれだけ馬鹿デカい口を

してるっていうんだ」

「私が、奴らに襲われる直前、ロウジさんに何を言おうとしたか、わかりますか」

奴らはガキなんかじゃない。奴らは――。

ロウジは首を振った。

「……化け物ですよ。奴ら、ここの連中を殺す瞬間、顔全体が口になったんです――」

１１、遭遇

顔全体が口になるーー想像が出来なかった。

「夢でも見たんじゃないか、スン」

「えぇ、夢だと思いますよ。恐らく我々はみな同じ夢を見ているんだ。とびきりの悪夢をね」

言外の意味ーー現実。ロウジはため息をついた。

「立てるか」

「もうしばらく休んだら」

もうしばらくーースンは使いものにならない。確かに、スンの言うとおり、ここは一時退却した方がよさそうだった。僅か二人で、数十の狼を短時間で食い殺せる化け物。右脚が使いものにならない今のロウジには手の余る獲物だった。

だがーー。

時間がない。ロウジには退却する時間などなかった。一刻も早く、リナを見つけ出し、リナを殺し、メロウを救い、体臭野郎をぶちのめす。その為には、極少のヒントを得るためにさえ、進んで地獄へ突き進まなければならない。

「奴らがどこへ行ったか解るか？」

「大兄、まさか、追う気ですか」

ロウジは横目にボヤジを睨んだ。

「当たり前だ」

恐怖はなかった。たかだかガキ二人。とち狂い、化け物になった愚かなガキを絞り上げるだけ。簡単な仕事だ。ロウジは自分に言い聞かせた。

「後ろからガツンとやられたもので、見てはいませんが、下から上がってきたロウジさんとボヤジが遭遇していないとなると……」

スンは天井を見上げた。

「上、だな」

このデパートは確か地上八階、地下二階建ての造りだった。つまりは三階より上、四~八階のどこかに奴らはいる。

「ボヤジ、行くぞ。スンは体力を回復させてから追ってきてくれ」

小さくスンは頷いた。ボヤジは大柄な体躯に反比例した豆粒ほどの肝っ玉の震えを、必死に抑えつけるように、深呼吸していた。

再びボヤジにおぶさり、階段を使って四階へ向かった。踊場で一度足を止め、耳を済ます。

四階は――紳士服売り場。静かすぎる。悲鳴もなにも聞こえない。そういえば、上階から逃げてきた狼は見なかった。とすれば、この

静けさはすでに奴らに食い散らかされたという証になるのだろうか。

「大兄、どうしますか」

「登るぞ。ゆっくりな」

「あの二人に出くわしたら、どうするおつもりで？」

心なしか、ボヤジの背中は震えていた。お前は餌だよ、お前を餌にしてそのガキどもをぶちのめすんだ――ロウジはボヤジの背中で冷たく笑った。

「ボヤジ、俺を誰だと思ってる？」

言葉の意味を解しかねたのか、何も答えず首を傾げた。

「狼星会をたった二人で追い詰めたロウジだ。片脚がいかれたところで、俺がガキ二人に遅れをとると思うか？」

ボヤジの背中の震えが止まった。

「さすが大兄。恐れる事は何もありませんね」

「もちろんだ」

さすがボヤジ。どうしようもない筋肉馬鹿だ、とロウジは思った。

四階に上がり、ボヤジの背中を降りた。フロアを見回す。異常はない。紳士服売り場は紳士服売り場としての体裁を保っている。

従業員と客が一人もいない事を除いて。
「どういう事だ？」
ボヤジにフロアの探索を命じた。ボヤジはハンガーにかけられたスーツを掻き分け、そこら中から何がしかの痕跡を探そうとしている。
一分が経ち、二分が経った。三分を回ろうとする頃、ボヤジが叫んだ。
「大兄！」
「どうした！」
松葉杖をつきながら、しかし、ロウジは迅速にボヤジの元へ向かった。
ボヤジが指差しててるのは高級時計が納められているショーケースの角だった。目を凝らす。僅かに血痕とおぼしき赤い液体が点々と付着している。
人差し指で液体に触れた。温かい。匂いを嗅いだ――血だった。
「まだ、新しいな」
「どういう事でしょう」
ロウジは腕を組み、思考を巡らせた。

三階の惨状に比べて、ここの落ち着きようはどういう事だ？　なぜ、何も壊れない？　何故死体がどこにもない？　あるのは僅かな血痕だけ。

考えが浮かばない。ロウジは舌打ちしてもう一度周囲に目を配った。

どこにも異常は見受けられない。しかるべき場所にスーツが並び、しかるべき場所に時計が飾られているだけだった。諦めずにもう一度。壁にはスーツの宣伝用にポスターが貼られてあった。顔立ちの整った長身のモデルが、スーツを着こなして爽やかな笑みを送っている。

進化する男になれーーキャッチフレーズとして、モデルの横にはそのような文字が印刷されていた。

進化ーーロウジの頭の中に電撃が走った。

進化。そう、奴らは進化しているんじゃないか？　狂狼剤の効き目かどうかは定かじゃないが、この短時間で奴らは進化している。

三階で虐殺を繰り広げた時よりも、さらに早く、それこそ誰の目にも止まらぬスピードで、体ごと食った。

スンの言葉ーー奴ら、顔全体が口になったんです。

この狂いようだった。体全体が口になっても、何もおかしな事はない。

化け物ーー疑いようがない。俺達が相手にしているのは化け物だ。

だとすれば、神狼がさばいているのはさしずめ化け物精製促進剤。ロウジの懐にも同じものが入っている。

そういえば、あの晩、バイク野郎はいった。

『狂狼剤は一日一錠までにしておくんだ。それ以上やると、取り返しのつかない事になる』

取り返しのつかない事――化け物になる事。

現実感が薄れていく。オカルトの世界。スンの言うとおり、起きながらにして悪夢に紛れ込んだ気分だった。

しかし、ロウジは笑った。

悪夢など生温い。ロウジは生きながら無間地獄にどっぷりと浸かっている。

「上等だ」

「大兄？」

「化け物をぶちのめす」

「はい！」

馬鹿デカい声を出すんじゃねぇ――ロウジの喉元に言葉が引っかかった瞬間だった。

天井が揺れた。最初は僅かな振動だった。ロウジとボヤジは顔を見合わせた。

次の振動――やや大きくなる。

「大兄、これは……」

「……喋るな」

その次の振動――大きかった。建物全体が揺れているような錯覚を覚えた。

直感――危機が近付いている。

「隠れろ、ボヤジ！」

叫んだものの、ボヤジには目もくれず、ロウジはショーケースとスーツの並びが重なり合った通路にしゃがみ込んだ。天井を見上げる――ひびが入っていた。

次の振動――天井が割れ、コンクリートの瓦礫が四階に降ってきた。そこかしこからガラスが砕け散る音が聞こえる。

巨大な穴になった天井をもう一度見上げる。何かがこちらを覗いているのがわかった。何か――化け物。

化け物は上から降ってきた。凄まじいスピードだった。視界には上下に影がよぎったようにしか見えない。

降ってきた化け物は、両手両足を床につけて、頭を腹の方向に向

けていた。こちらからは後頭部しか窺う事ができない。

後頭部——坊主頭。ボヤジの言うとおりだった。赤いシャツにダメージ系のジーンズを履いている。

静寂——しばらくの間、化け物を初め、ロウジもボヤジも誰も動かなかった。息さえしなかった。

ボヤジは？——ロウジの後ろにいた。弾避けが俺の後ろにいてどうする。怒鳴りつけたかったが、今はそうもいかない。

ゆっくりと、化け物が顔を上げた。

ロウジは息を飲んだ。その化け物は凄まじい形相をしていた。頬は紅色に膨れ上がり、口の両端が裂け、耳の辺りまで届いていた。涎の代わりに血を垂れ流している。黒目の部分が縦に細長く変形し、真っ赤に充血していた。爬虫類を思わせる目つきだった。

正真正銘の化け物。どうやって退治してやろうか。ロウジは松葉杖を握り締めた。

ボヤジが背後で縮こまって震えていた。

苛つく。ボヤジは弾避けにすらならないでくの坊だった。何のための筋トレだ。ロウジは心底呆れ果てた。

四つん這いのまま、化け物が顔を左右に揺らした。獲物を探している。俺達を捜している。

化け物との距離は六メートル前後。気付かれれば一瞬だろう。コ

ンクリートを素手で粉砕する破壊力と、目にも止まらぬ速さで移動するスピードを備えた化け物。

理想は気付かれる前にぶちのめすーーあわよくば生け捕りにする。神狼の、リナの居場所のヒントを手に入れる。

どうする、どうするーー？

軽やかな電子音がポケットから鳴り響いた。携帯の着信メロディー。ロウジの背筋が凍った。化け物が、こちらに視線を向けた。

12、大地贅精

こんな時に、どこの大馬鹿野郎だ？

ロウジは顔をしかめた。もちろん、誰からの着信かを調べている時間はない。化け物はロウジをターゲットに定めた。

どうするーー化け物を見る。

……化け物は消えていた。

「大兄、上です！」

背後からボヤジの叫び声が聞こえた。上ーー化け物がロウジ目掛けて降ってくる。

超スピードーー上体を反転させて避ける。ロウジが隠れ蓑にしていたショーケースが砕け散った。

「おおおぉ！」

ボヤジが化け物に突進した。四つん這いのままの化け物に上から覆い被さり、左腕を首に絡め、さらに右腕を左腕に縦に重ね合わせた。

「いいぞボヤジ。そのままだ」

コンクリートの破片を手に取り、ロウジは立ち上がった。

「顔を上げさせろ」

ボヤジが顔を紅潮させながらロウジの命令に従った。馬鹿でかいボヤジの両腕は今にもはちきれそうなほど血管が浮き出ている。

対して、化け物の方は余裕とも思われる表情をしていた。化け物風情が、舐めやがって。ロウジはコンクリート片を思い切り化け物の顔面に叩きつけた。

「大、兄」

「どうした、ボヤジ？」

「こいつ、やはり、凄い、力……」

ロウジの渾身の一撃をものともせず、化け物はボヤジの腕を首だけで解こうとしていた。みるみるうちに、ボヤジの両腕が下がっていくーー解かれた。

瞬間、化け物は後頭部をボヤジの顎にぶつけた。ボヤジはそのまま仰向けに倒れ、顎を押さえながら悶絶した。

化け物がロウジを見上げた。心なしか笑っているように見えた。

遊んでやがるーーロウジは思った。俺達を追い詰め、恐怖を再確認させてから、美味しく食らう。化け物は進化している。変態のサド野郎に。

逃げるーーどこへ？　使いものにならない右脚で果たしてどこに逃げる？

逃げるーーどこへ？　人生は無間地獄。どこまで走っても、ロウジの目の前の景色は変わる事のない憎悪の炎に彩られている。

戦うーー目の前の化け物と。体が砕け散り、骨まで奴に食い尽くされる様を想像する。

体が震えるーー武者震い。違った。この震えには悪寒が伴っている。

恐怖ーー懐かしい感情だった。メロウを失うという恐怖は体臭野郎の飼い犬になってからロウジの日常にまとわりついてきたが、自分が殺されるかもしれないという恐怖を味わうのは久しぶりだった。

動悸が激しくなる。筋肉が硬直する。蛇に睨まれた蛙。化け物は今にもロウジに飛びかかってきそうだった。

何故死を恐れる必要があるーー誰かがロウジに言った。

お前の人生に何がある？　首尾よくメロウを助け出せたとして、お前にメロウの人生を幸福に染める器があるのか？

なかった。そんなものはありはしなかった。あるはずもなかった。ロウジにあるのは絶望と憎悪と呪いだけだった。

それでも生きたいーーロウジは思った。メロウと共に生きたい。メロウを幸せにしたい。無理と解っていても、僅かな可能性に縋りたい。

愛しいメロウ。

『不器用な人』

『惚れたって事を性欲でしか示せないっていう意味よ』

化け物の馬鹿でかい口が、ロウジの左肩に迫っていた。全ての動きが緩やかに見えた。ロウジは松葉杖で化け物の頬をはたいた。

松葉杖が折れた。とっさに腰を落とす。肉を食いちぎられた。骨までは達していなかった。

殺される。間違いない。間違いなく俺はこの得体のしれない化け物に殺される。死を実感した。化け物に死神の姿が重なった。

腰に力が入らない。恐怖の鎖がロウジの体を縛り付けていた。化け物はようやく二本の足で立ち上がり、前かがみの姿勢でロウジを見下している。

化け物にすら見下される自分。世界が呪わしかった。最低の人生を謳歌した最低の狼として死んでゆく自分が情けなかった。

死神の姿がオウキに変わり、レンに変わった。ロウジはそれでも死を由としなかった。生きたい。生き続けたい。お前らと一緒にはなりたくない。

化け物が口を大きく開いた。鼻と目が上がり、確かに顔が口だけになったようだった。

どうすればーー懐の狂狼剤を思い出した。凄まじい力を得られる。脚の痛みを吹き飛ばし、縦横無尽にこの呪われた大地を駆け巡る事

が出来る。化け物と対等になれる。
化け物になれる。
恐れる必要はなにもない。ロウジが恐怖すべきは自信とメロウの消失だけだった。
急げ——懐に手を入れる。化け物の口が半ば倒れかかって近づいてくる。
急げ——がむしゃらに狂狼剤を取り出し、口に放り込んだ。飲み込んだ。
化け物の口は目の前。死神の鎌が首にかかった。
視界が化け物の口内に覆い尽くされた。黄泉の世界へ片腕を引っ張られていた。
頭と顎に痛み——化け物の牙が突き刺さった。死神の鎌が降り下ろされた。
爆発した。
全ての時間が緩やかになった。ロウジは右拳を化け物の腹にえぐりこんだ。視界が変わる。死神も消えた。化け物は吹っ飛び、衝撃でいくつかのスーツに身をくるませながら、壁に背中をぶつけた。
「大兄……」
視界の右隅。筋肉馬鹿が消え入りそうな声で呟いた。このでくの

坊はなんだってこんなところに転がっている？

どうでもよかった。凄まじく健やかな気分。世界が晴れやかに見えた。

何かを恐れていた気がした――忘れた。

何かを憎んでいた気がした――忘れた。

何かをしようと思っていた――化け物をぶちのめせ。

ロウジは笑った。勃起が始まる。俺にぶちのめされる為だけにある化け物。愛おしい。愛おしくてたまらない。

化け物は壁に脚をかけ、ロウジに向かって垂直に跳んだ。くるまっていたスーツが舞う。ロウジは蠅たたきのように化け物の頭を平手で叩いた。化け物が地べたに転がった。

ロウジは化け物を見下した。化け物は頭をかかえてのたうちまわっていた。快感が心を踊らせる。この化け物を蹂躙したい。ありとあらゆる苦痛を与え、この世の全てを呪わせた上で、緩やかに殺してやりたい。

ロウジは射精した。化け物の股間を右足で踏みにじった。

化け物が獣のような雄叫びをあげた。それに呼応するように、天井の穴からもう一匹の化け物が降ってきた。

愉しい。愉しくてたまらない。ロウジは感謝した。愛すべき化け物を二体も与えてくださったこの素晴らしい世界の創造神に。

ロウジは右脚に体重をかけた。心地よい感触。化け物のペニスが潰れた。化け物が絶叫した。

もう一匹の化け物がロウジに襲いかかった。この化け物も顔が口になっていた。しゃぶらせたい衝動に駆られる。愛すべき俺の化け物に、俺のペニスをくわえさせたい――再びペニスがそそりたった。

ロウジは両腕を広げ、宙に舞う化け物を抱き止めた。抱き締めた。化け物がロウジの腕の中で暴れる。駄々をこねる子供のようだった。

我が息子、化け物よ。お前を愛している。お前の望みを叶えてやろう。父なる気持ちがロウジに溢れた。

力強く抱き締める。化け物は言った。

『大好きだよ父さん』

「俺も愛してる」

愛してやまなかった。骨の折れる音が聞こえた。

13、ガーディアンウルフ

ウルフ・ロックはほぼ真円の形をした人口島であり、別名、ビック・ピッツァとも呼ばれている。それは一番街〜十番街が、円の上部から時計回りにピッツァをスライスしたような形で存在しているからだった。

つまり、一番〜十番街は中心で全て繋がっている。しかしながら、中心部にはゲートと呼ばれる門がやはり円形に島内に設置されており、そこはウルフ・ロックの《最高権力機関》が厳重に管理している為、一般の狼が通行する事は出来ない。

最高権力機関――元狼院。そのゲートに護られるようにして、ウルフ・ロックの中心にそびえ立つ尖形のビル、ギアナに存在する古狸。ウルフ・ロックにおけるホワイトハウス。島内の政策は全て、この中で取り決められている。

「政策か。そんなものがこの島のどこに見受けられる？」

ジョーは三番街、ガーディアンウルフ本部の食堂、窓辺のカウンター席で昼食を採っていた。サンドイッチを口に運びながら、窓の下に広がるビーチを見下ろす。休日のビーチはサーフィンや日光浴を楽しむ若者で溢れかえっていた。

「で、その馬鹿げた法案は可決したのか？」

隣りに座っているメイが溜め息をついた。

「えぇ。先程決まりましたわ」

「冗談じゃない。マフィアのクズどもに、またしてもこの島の法律を譲るというのか？　元狼院は何を考えている」
今まで、ウルフ・ロック全体の自治は形式的とはいえガーディアンウルフに任されてきた。新しい法案は、それを撤廃し、ガーディアンウルフがその権限を行使出来るのは三番街のみに限定するというものだった。
「どんどん、狂っていくな。この島は」
太陽光が食堂内に差し込む。メイは左手を額にかざし、ジョーを横目に見つめた。
「署長は、喜んでいましたよ。仕事が減って助かるって」
舌打ち。あの給料泥棒め。ジョーは顔をしかめた。それを眺めながら、メイは悪戯っぽく微笑んだ。
「何が可笑しい？」
「あなたは本当に変わっているわ。正義に燃える男。ガーディアンウルフ、いえ、ウルフ・ロック中を捜したってそんな狼(ひと)はあなたしかいない」
小馬鹿にされているのか――ジョーはメイを睨んだ。メイは笑顔を崩さずに続けた。
「どうするんです？　これから」

「変わらないさ。俺は変わらない。元々法律なんておざなりの島だ。俺は俺のやり方でマフィアを潰していく」

メイが小首をジョーの肩にもたらせた。彼女の長い髪からシャンプーの香りが漂ってきた。

「……よせ」

「いいじゃない。どうせ誰もいないわ」

メイの言うとおり、広い食堂内はガランとしていた。警察組織とはいえ、休日に出勤する者はほとんどいない。これも元狼院が定めた法律によるものだった。

「署長にバレたら、君はクビだぞ」

「バレなければ、クビにはならないわ」

「やれやれ」

メイ――署長秘書。実際は愛人だった。ストレートの長髪。二十代後半のはずだが、洗練された色香は彼女に年齢以上のものを漂わせている。もちろん、それは老けているという意味合いではない。顔立ちだけみれば二十代前半で通じた。一重瞼に薄化粧。どこか挑発的な視線を常に保っている。

何度か、メイと寝た事がある。彼女に誘われた。寝る以外にする事はなかった。署長に対する罪悪感もなかった。ただそれだけの関係だった。

「今、する？」

「馬鹿をいうな」

メイを押しのけるようにして、ジョーは立ち上がった。くだらない仕事が残っている。

「つれないのね」

「君が何を考えているのか知らないが、俺は公私を混同する男じゃないんだ。上で鼾を掻いてる、あの給料泥棒と違ってね」

ジョーは天井を見上げた。そこは署長室の場所だった。

「だから、好きなのよ。あなたが」

ジョーはそれには答えず、食堂を出た。廊下を左に曲がり、エレベーターに乗る。二階へ。

規則的に並べられた机の上には、雑然と書類が散乱していた。ジョーは自分のデスクに座り、昨日届けられた被害届けに目を通した。

被害者は二番街の小娘。二番街のゲームセンターで一昨日の深夜レイプされた。額と肛門に裂傷。変態野郎に犯されたと病院で喚き散らしていたらしい。

小娘の供述によると、犯人は狼星会のチンピラ。狼星会——糞の溜まり場。頭のバラスは信じられない程の外道だった。

暴狼剤の売買はウルフ・ロック中のマフィアの運営の常套手段だ

が、バラスはそれに飽き足らず、狼身売買にまで手を染めているという噂がある。

これが事実だとしたら、とんでもない話だ。麻薬なんざチンケなものだが、狼身売買は桁が違いすぎる犯罪だった。まだ年端もいかない少年少女をさらい、島外の変態に売りつける――つまりは人間に売りつける――鬼畜の所業。許すわけにはいかなかった。

深夜にゲームセンターで遊びふける被害者など、どうせ元来性悪の小娘に違いない。こいつに同情の余地などないが、狼星会に付け入る隙を見いだす事が出来るかもしれない。

ジョーは念入りに書類に目を通した。犯人の特徴を正確に頭に刻み込む。

……？

どこかで見たことのある造形が頭に浮かんだ。それをさらに、立体化し、鮮明にする。

……！

体中に電撃が駆け巡っていくのを感じた。頭の中に一人の男の名前が浮かんだ。

ロウジ。

確かに、以前、狼星会で用心棒まがいの仕事をしているというのを耳に挟んだことがあった。

まさか――。

「こんなところで再開出来るとはな」

思わず口に出た。暗黒の喜びが毛穴という毛穴から噴出されていくような気がした。究極の憎しみが大気という大気に染み渡っていく気がした。

丁度いい機会だ。狼星会と共に消してやる。

法案が可決されたとあれば、ジョーが自由にガーディアンウルフとして行動出来る時間は限られている。

急がなければならない。

ジョーが決意を固めた瞬間、けたたましいベルが鳴った。受話器を取る。

「ガーディアンウルフ本部、特殊犯罪調査室」

「二番街で暴動だ。場所は総合デパートのイルマ。休みの奴らは全員叩き起こした。すぐに現場へ向かってくれ」

気だるそうな署長の声。緊張感はまるで感じられなかった。

「了解」

叩きつけるように受話器を置いた。二番街――狼星会の仕切る街。偶然とはいえ、タイミングがいい。ついでに狼星会に探りをいれよう。

ジョーは立ち上がり、現場へ向かった。

１４、狂狼止まらず

鉛のような倦怠感が頭の上にのしかかってくる。右脚に痛みが戻ってくる。全てが呪わしく、何もかもが憎らしくなる。

ロウジは右手で頭を押さえ、足元に倒れている化け物を見下ろした。

片方の化け物――股間を両手で押さえ、身悶えている。ジーンズの股間部分が黒い滲みに浸食されていた。

もう片方の化け物――こちらは仰向けに寝そべったまま、ほとんど動かない。しかし、僅かに胸が上下していた。かろうじて生きていた。

記憶を探る――何故こうなった？

記憶の奔流が頭痛を呼び起こす。ロウジは思い出すのをやめた。

もう一度化け物を見やる。口は裂けたままだったが、頬の紅潮は消え、細長くなった瞳は円を描いていた。

化け物はただのクソガキに戻っていた。

「おい」

股間を押さえている方のガキに声をかけた。反応はない。

左足で股間を踏みにじる。絶叫。ガキが涙を流すのがわかった。

「おい」

もう一度言った。目と目が合った。

「俺がわかるか。わかるなら答えろ」

「……か、か」

声が掠れていた。化け物になった後遺症か。まともな返答は期待出来ないかもしれない。だが、こちらの言っている事が理解出来ないほどいかれたわけではなさそうだった。

「喋れねぇのか。おい。だったらまばたきで答えろ。一度ならイエス、二度ならノーだ。わかったな？」

ガキがゆっくりと瞼を閉じ、開いた。一度だけ――イエスの意。

「お前ら、狂狼剤をやったな？」

まばたきは一度。

「手に入れたのはどこだ？　パンドラか？」

ロウジは神狼のバイク野郎に出くわしたゲームセンターの名前を口にした。まばたきは二度。

舌打ち。イエスとノーしか返答出来ないクソガキからどうやって売人の事を聞き出すか。もどかしさがつのる。苛つきが頭痛を増長させる。

何か手を考える。ガキはひたすら悶えている。恐らくはペニスが潰れている。いつ意識を失うかわからない。

周囲を見回した。天井に穴が空き、瓦礫とガラス片、そして何着ものスーツがフロア全体に散らばっている。

その中にもう一つガラクタを見つけた。筋肉馬鹿が口を開けて伸びている。

どこまでも使えない無駄な筋肉の塊野郎。苛つきに拍車がかかる。忌々しさに表情が歪む。

まだ、使えそうなチビを思い出す。携帯を手に取り、スンを呼び出そうとする。ディスプレイ——着信ありの表示。

おぼろげな記憶が蘇る。目の前に転がっているクソガキ、元化け物に気付かれた原因はこの着信にあった。

どこの馬鹿だ？　着信履歴を確認した。

見知らぬ番号だった。後回しにする事に決めた。

携帯をしまう——何かが頭にひっかかり、もう一度携帯を見つめた。

閃いた。

「よし。お前、英語はわかるか？」

ガキのまばたきは二回。

「馬鹿が。アルファベットでいい。お前が狂狼剤を仕入れた場所をアルファベットで教えろ。Aならまばたき一回、Zなら二十六回だ。それならいけるだろう？」

ガキは苦悶の表情を浮かべた。そんな事より手当てをしてくれ、俺を病院に連れてってくれ——言わずも意志が伝わってくる。

ロウジは冷たく笑った。久しぶりに、残酷な喜びが体中でざわついているのをひしひしと感じた。

「これに答えたら、病院に連れていってやる。さぁ、やれ」

ガキはキツく目をつむった。まずはイエスの意志表示から。

最初のまばたきは十六回——P。

次は一回——A。

その次は十八回——R。

その後、A、D、I、S、Eと続いた。

P、A、R、A、D、I、S、E。

パラダイス——驚愕。そして困惑した。

「パラダイスだと？　お前ら、バラスの膝元で狂狼剤を買ったのか？」

まばたきは一度。ロウジはため息をついた。

確かに、パラダイスなら、二番街の馬鹿ガキ共が集まるあのクラブなら、狂狼剤を欲しがる客は腐るほどいるだろう。

だが、それには最高レベルの危険が伴う。事がバラスの耳に、目に入れば、売人もガキも、生きながら地獄の苦しみを味わう事になる。

「狂ってやがる」

口に出た。狂ってる――神狼の売人も、快楽に身を委ねるガキ共も、救いようがなくとち狂っている。目の前でのたうち回っているガキ共。目先の快楽に突っ走った挙げ句、化け物に変貌し、後戻りの出来ない無間地獄に体ごとどっぷりと浸かった哀れな馬鹿ガキ。

お前も変わらない――オウキが言った。

あなたも変わらないわ――レンが囁いた。

目先の欲望に突っ走り、レンを殺し、最愛の娘をバラスに奪われ、それからは下衆野郎の使いパシリに成り下がっている。

『不器用な人』

「黙れ」

頭痛が堪えがたくなる。目眩がロウジから情景を奪い去っていく。

「俺は違う。こいつらとは違う！」

ロウジは叫んだ。黒い衝動が情景に取り残される。これを吐き出さなければ、息をする事もままならない。

ガキは二匹いる――一匹殺そう。一匹殺して気を紛らわせ。ありとあらゆる苦痛を与え、この世の全てを呪わせてやれ――。

ロウジは深く息を吸った。目眩が消え、頭痛がマシになった。

ガキが懇願の視線を送ってきている。地べたからロウジに救済を求めている。

「差し伸べて欲しいか？　手を」

まばたきは一回。ロウジは笑った。

「足なら、差し伸べてやるよ」

ガキの股間を踏みにじる。ガキが声にならない絶叫をあげた。愉しい。愉しくてたまらない。股間から力が漲るのを感じた。ロウジは激しく勃起した。

右脚から痛みがひいていく。ガキが苦しめば苦しむほど、ロウジから痛みが薄れていく。

今にもガキは気絶しそうだった。表情が虚ろいでいく。生への意志が現実から逃れようと、意識を精神の内へ隠そうとしている。逃がさない。逃げ場所などどこにもない。世界が果てのない無間地獄だという事を教えてやる。

ロウジは股を開いてガキの腹に腰を降ろした。床に転がった瓦礫から適当な大きさのものを見繕って手に取った。

「ついてなかったんだよ、お前は。狂狼剤になんざ手を出さなきゃよかったんだ。手を出すにしたって群れなきゃよかった。一匹だったらもう少し優しくしてやれたのにな」

呻きがガキから漏れた。呻きは絶望の度合いと反比例するように小さかった。

瓦礫で頬を張った。瓦礫で頬を殴った。瓦礫で鼻を潰した。鼻血がどぼどぼと溢れ出た。

掌でガキの口を覆った。鼻で息をしようとするガキ――ままならない。鼻血が喉に逆流し、詰まる。より一層苦しみが増したようだ。ガキが涙を流した。手を離した。

「なぁ、教えてやるよ。お前はこれから死ぬ。病院になんか行けない。ここで俺に、長い時間をかけてなぶられ、体も心もズタズタになって死ぬんだ。たまらねぇだろう？　怖くて仕方ないだろう？」

一切の希望を剥奪しろ、一切の未来を蹂躙しろ――黒い衝動は止められない。何者にも止められない。止める事などできはしない。止まる事などありはしない。

だから、お前はダメなんだ――オウキの声。

だから、あなたはダメなのよ――レンの囁き。

だから、あんたはダメなんだよ――リナの嘲り。

だから、てめぇはダメなんだ――バラスの呪い。

死者と生者、悪霊と生き霊の呪詛が頭の中をぐるぐると回る。しかし、ロウジは止まらなかった。止まってしまえば、奴らの呪詛を認めてしまう事になる。そうか――ロウジは気付いた。

だから俺は止まれないんだ。

がむしゃらにガキを殴り続けた。ガキの顔が化け物より化け物らしく変形していく。

見ていろ。俺は止まらない。何者にも俺を止める事など出来はしない。お前らの罵詈雑言などに俺が耳を貸すことは永劫にない。だから黙れ。その耳障りな嘲笑を二度と俺に聞かせるな。

殴り続けた。ガキが息をしていないのに気がついたのは、ガキの顔面がただの肉塊に変貌してからの事だった。

どこからか、サイレンの音が聞こえた。それと同時に、携帯が鳴った。スンからの着信だった。

「ロウジさん、無事ですか？　化け物は？」

「あぁ。何とか片付けた」

「そうですか。それでは引き上げましょう。ガーディアンウルフがこちらに向かってきています」

電話を切り、ロウジは立ち上がった。生きている方のガキを確認する。こいつがまだまだ必要になる。だが、今のロウジに迅速にガキを運ぶだけの体力は残っていない。

伸びている筋肉馬鹿の頭を、左足で蹴飛ばした。

15、美狼演

いつの間にか眠っていた。重い瞼をこじ開けるように右手の甲を両目に押し付けると、リナは上体を起こしてベッドの縁に腰をかけた。

窓から陽光が差し込んでくる。外に見える森が、夕べここに着いた時より遥かに青々しく映った。

軽く伸びをして、リナは立ち上がった。窓を開ける。新鮮な空気が小鳥のさえずりと一緒に部屋に流れ込んできた。

「起きたかい？」

びくりとして振り返る。ドアの前にヤクルが腕組みして立っていた。

「いつからそこにいたの？」

「君が目覚める少し前さ」

悪びれずにヤクルが言った。今日は長髪を後ろに束ねている。青い半袖のシャツに濃紺のパンツ。昨日とは雰囲気が違う。しかし、昨日と変わらず美しかった。

「随分ラフじゃない。とてもマフィアに見えないわ」

「ゼウスがね、嫌うんだよ。そういう、マフィア然とした格好をね」

ゼウス――寝ぼけ眼に強烈な喝が入る。

「ゼウスはここに？　ここに来てるの？」

「あぁ。来てるよ。後で君にも会いたいって言ってた」

朝一番の不快感がリナを襲った。後で？　ふざけないでちょうだい。

私はリナ。ありとあらゆる男を屈伏させる魔性の魅力を持つ女。全ての男の優先順位は常に私が第一位。後回しなどありえない。後回しなど赦されない。

「今すぐゼウスに会わせて！」

声を張り上げた。昨日からずっと待っていたのだ。これ以上の待機など耐えられない。

「まぁまぁ」

ヤクルが微笑みながら近寄ってきた。金縛りに似た微笑み。動けない。口を開く事も出来ない。

「そんな顔しないでよ、リナ。美人が台無しだ」

ヤクルの人差し指がリナの唇に触れた。ざわざわとした感情が体の内側から肌を突き破ろうとしているのを感じる。乳首が勃ち、服にこすれる。性器が濡れる。

「今はする事もないし、やるかい？」

馬鹿言わないで――簡単に私の体を弄べると思わないで。私は何も求めない。いつだって求められる側に立つ女。それを受け入れるか否か、取捨選択の権利は常に私が持っている。

それなのに、そのはずなのに――。

言葉にならない。否定を口にする事が出来ない。

やっぱり、私はおかしくなっている。何もかも、あの下衆野郎のロウジのせいで。

一刻も早く、殺さなきゃ――。

暗黒の誓いを頭の中で唱えながら、リナはヤクルのなすがままになっていった。

「テレビをつけよう」

激しい性交のすぐ後、全裸のヤクルは息を切らす事もなく、平然とそう言ってのけた。

対してリナはくたくただった。性器が痙攣している。息遣いは乱れたまま。体を動かす力など残っていなかった。

横に長い液晶テレビからざわめきが聴こえてきた。リナはうつ伏せのまま体勢を百八十度変え、ぼんやりとディスプレイを眺めた。

見覚えのある街並み――二番街セントラルストリート。リナの行きつけのブティックが建ち並んでいる。ブスのニュースキャスターが慌てた声で何事かをまくしたてていた。よく見ると、ブスの背後にかなりの数の狼(ひと)だかりが溜まっているのがわかる。

ブスの背後――二番街最大の総合デパート、イルマがそびえたっていた。

「なに、これ？」

「まぁ、見てなよ」

『……中の様子は依然としてわかりませんが、多数の死者が出た模様です。目撃者によると、イルマを襲撃したのは二人組の少年、二人組の少年です。また、それを追ってマフィア風の男性三名がイルマに侵入したらしく……』

ブスは続けて三名の特徴を挙げた。

一人――身長百五十センチ前後。右手にナイフを所持。

一人――筋肉隆々の巨漢。野次馬を数名なぎ倒した。

一人――身長百七五センチ前後。右脚に包帯。松葉杖。

性交の余韻が消えた。リナのよく知っている三人に間違いなかった。

ナイフ使いのチビ――スン。不細工のサイコ。リナの裸を時々覗いた変態野郎。

巨漢――ボヤジ。筋肉馬鹿でドエムの変態野郎。ストレス発散にちょくちょくペニスを踏みにじってやった。

右脚に包帯――ロウジ。言わずもがな、殺さねばならない下衆野郎。

「右脚に包帯って、やっぱりロウジだよね？」

「間違いないわ。だって他の二人も狼星会の変態だもん」

ヤクルは右手を頭に乗せた。

「まいったなぁ」

リナに向けて困ったような笑顔を送る。しかしその実、ヤクルの笑顔には確かな歓喜も伺えた。

「てゆうか、これは何？　二人組の少年って？　あんた達が仕組んだの？　二番街で何が起こってるのよ!?」

次から次へと疑問が浮上していく。まだ何も知らない自分が苛立たしい。何も教えてくれないヤクル達が憎たらしい。

リナは突っ立ったままテレビを見つめるヤクルを背後から抱きしめ、左手でヤクルの乳首をつまみ、右手でペニスを包み込んだ。

「今教えてくれたら、もっと気持ちいい事してあげてもいいんだよ」

乳首をくすぐるように弄ぶ。ペニスを撫でるように弄ぶ。普通の男なら、リナの誘惑に自ら快楽を懇願するはずだった。

「いや、今はそれどころじゃないんだよね」

平坦な声がした。心のどこかに、穴が開いたような気がした。その穴がリナから、何かかけがえのないものを、生きる為に必要不可欠なものを吸い尽くしていくような気がした。

なかば崩れ落ちるようにベッドに座った。ヤクルは何かに頭を捻っている。

胸が痛かった。目頭が熱くなってきた。どうして振り向いてくれないの？　どうして私を拒むの？

涙がこぼれ落ちそうになる。目をきつく瞑った。私が男相手に涙するはずないじゃない。おかしい。何かがおかしい。全てはロウジのせい。あいつに唇を奪われたせい。

怒りの炎が黒く染まっていく。ヤクルのせいではない。私のせいではない。何もかもあの下衆野郎のせい。

リナは唇を咬んだ。血の味が口内に広がった。

ヤクルが思いたったように、ベッド脇の室内電話に手を伸ばした。内線ボタンをプッシュし、その後、１０２に電話をかける。

「あぁ、ゼウスかい？　……うん、見てるよ。それがさ、どうも二人を追って中に入ったマフィアって、ロウジの事らしいんだ。

……うん、リナも間違いないって言ってる。
どうする？　面倒な事にガーディアンの奴らも向かってるみたいだしね。……了解。じゃあガーディアンの方はゼウスに任すよ。俺はロウジの方ね。でなかったらどうする？　……わかった。まぁ、ロウジには狂狼剤持たせてあるし、上手く使ってくれると思うから大丈夫じゃないかな。……うん、じゃあ後で」

ヤクルが話した相手はゼウス。ヤクルがかけた部屋番号は１０２。頭の中に情報をしまい込む。

「ねぇ、ロウジに電話かけてもらえる？」

先ほどの拒絶をまるで気にもかけていないというように、ヤクルの口調は穏やかだった。

「嫌よ」

リナは顔を背けた。精一杯の自尊心の誇示――情けなくて再び涙が出そうになった。堪える。

「怒ってるのかい？」

「……別に」

「リナ、ごめんね」

驚いてヤクルに振り返った。ヤクルはすまなそうな顔をしている。

「俺さ、ちょっと鈍感なところあってね。女の子の気持ちとか、無碍にしちゃう事がたまにあるんだ。リナを傷つけたなら謝るよ。

俺、結構リナに惚れてるんだ」

黒い炎が鎮火されていく。ひび割れた大地に可憐な花が咲き誇る。ヤクルが私に謝っている。ヤクルが私に惚れている。

「リナにはもうすぐ、本当の事を話すからさ。だから今は俺の言うとおりにして欲しいんだ。電話するのが嫌なら、番号を教えてくれるだけでもいいよ。ね、この通り」

両手を合わせ、頭を下げるヤクル。いじらしい。愛おしい。なんて可愛い忠犬なの。

「番号教えるくらいなら、いいよ」

本音は違った。いくらでも携帯を使わせてあげる。いくらでも私に触れさせてあげる。

勿論、本音を言うことはリナのプライドが許さなかった。

携帯からロウジの番号を検索し、口に出す。

「サンキュー」

全てが夢幻だったかのように、ヤクルはリナを視界から外し、ロウジに電話をかけていた。

16、パートナー

三番街から二番街へ——車をフルスピードで海沿いの道路を走らせた。休日、道は混んでいる。久しぶりにサイレンを鳴らした。次々と前を走る車が車線を変更していく。

二十五分で二番街セントラルストリートに辿り着く。ブティックやレコードショップが建ち並ぶ道の一番奥に馬鹿でかい総合デパート、イルマが見えた。

野次馬達をクラクションで散らし、すでに到着していた同僚達の車——白のパトロールカーの群れの最後尾に停車する。

「お疲れ様です」

ジョーが車を降りると、そそくさと駆け寄ってきたガーディアンウルフが言った。紺色の制服に身を包んだ小柄な男。スポーツ刈りに極太の眉毛。見覚えはあったが、名前は思い出せない。

「中はどうなってる？」

「一階は酷い惨状です。そこかしこに店員や客の死体が転がってます」

「犯人は？」

「まだ見つかっていません」

「袋の鼠相手に何をやってるんだ？」

苛ついた声で男を睨んだ。気まずそうに視線を反らし、男は入口付近にたむろしている同僚の方へ顔を向けた。

十数人のガーディアンウルフ達。皆一様に、呆けた顔でイルマを見上げていた。

「あいつらは？」

「すみません、自分はまだ新米なので、先輩の言うことに逆らえないんです」

「先輩は何と言っている？」

「とりあえず、待機、と」

舌打ち――男の顔が青ざめていく。

未曽有の殺人事件。大方入口付近の奴らは犯人にびびりきり、誰かがどうにかするのを待っている。誰かなど、永劫に訪れるはずはない。そもそもその誰かとは自分達ガーディアンウルフであるべきだった。誰もがそれを知っている。知っていて現実から目を背けていく。単なるデク人形に成り下がっていく。

腐りきった法律がガーディアンウルフの怠慢を助長していた。奴らはもはやガーディアンではない。単なる腑抜けに過ぎなかった。

「お前、名前は？」

「ヤマキです」

ヤマキは青ざめた表情のまま敬礼した。

「ここだけの話だ。ヤマキ、お前はあの先輩達をどう思う？」

ヤマキの目を見据えて言った。ヤマキは困惑している。自分が試されているのは解っている表情だった。ただ、どう答えるべきか解らないでいる。

「遠慮するなよ、ヤマキ。少なくとも俺の立場はお前の先輩より遥かに上だ」

発破をかけてやる。ヤマキから迷いが消えた。青ざめた表情が艶を取り戻していく。

「自分は、先輩達を軽蔑しています！」

ジョーは笑った。まともな奴に出会えたのは久しぶりだった。

「よく言った、ヤマキ。お前、男になりたいか？」

「はい！」

「それなら、俺についてこい。俺がお前を鍛えてやる。立派なガーディアンウルフにな」

「はい！」

ヤマキの肩を叩いて、ジョーは入口に向かった。

入口の前まで歩くと、間抜け面のガーディアンウルフが一斉にジョーに視線を向けた。

安堵と不安の入り混じった顔。ジョーが来た事に対する安心。職務怠慢を咎められる事に対する恐れ。己の保身しか考える事の出来ないクズども。

入口——ガラス張りの自動ドアの向こうに目を凝らした。ヤマキの言うとおり、ショーケースが割れ、衣料品が散乱している。そして、死体が散乱している。

ジョーは一番近くの腑抜けに目を向けた。慌てて視線を反らそうとする腑抜けに近寄り、強引に肩を組む。

「そう怯えるな。別に、お前らに期待しているわけじゃない」

愛想笑いを浮かべる腑抜け——もし二人きりだったら間違いなく殴り倒していた。

「どこまで調べた？」

「あ、いえ、その……」

腕を首まで回した。僅かに力を込める。腑抜けが苦悶の表情を浮かべた。

「どこまで調べたかと聞いてる」

「い、一階だけです」

「裏口に誰か回したか？」

「いえ、まだです」

苛つきが募る。袋の鼠に穴を空けてやってどうする。こんな奴らと同僚である自分が情けなかった。

周囲のガーディアンウルフ達の視線が再びジョーに集まった。ジョーに対する不満を瞳に浮かべている。だが、それ以上に強い恐れが不満に勝り、目の中で行き場を失ってぐるぐると回り続けている。

「仕事だ。お前ら半分、裏口に回れ。俺とヤマキが犯人をあぶり出す」

今度は背後にいるヤマキの方へ視線が集まった。露骨な嫌悪。腑抜けどもがざわめく。新入りがジョーに取り入って抜け駆けか？　生意気な事を——声に出さずとも、くだらない意志が黒い感情の波に運ばれてくる。

ジョーは腑抜けの首を離した。腑抜けが軽く咳き込んだ。

「今日からこいつは俺の相棒だ。文句があるならまず俺に言え。言えない奴らがこいつを貶めるような目をするな」

ジョーは腑抜けを一人一人睨みつけていった。腑抜けは一人一人俯いていった。

「行くぞ、ヤマキ」

一階の惨状を目の当たりにし、ヤマキが吐いた。ゲロが首筋を咬みきられて死んでいる女の顔に降りそそいだ。

「死体を見るのは初めてか？」

むせ返るヤマキの背中に尋ねた。ヤマキは息を切らしながら、何とか言葉を紡いだ。

「は、はい。すみません」

「お前、出身は？」

「五番街です」

五番街——合点がついた。ウルフ・ロックの中でもっとも治安の良い街。別名カジノ・パラダイス。大富豪達が昼間はショッピングにうつつを抜かし、夜は煌びやかなネオンの下、ギャンブルに精を出す。

五番街出身という事はヤマキもどこぞの金持ちの倅だろう。死体を見た事がなくて当然だった。

「何故、ガーディアンになった？」

膝に手をつき、肩で息をしながらヤマキが振り返った。その目にはしっかりとした光が宿っている。

「憧れてたんです。ジョーさん、あなたに」

ジョーは顔をしかめた。目の前の新米に憧れられるような事をし

た記憶はない。

「どういう事だ」

「覚えてませんよね、やっぱり」

「あぁ」

「八年前の事です、自分が十五の時――」

小さな足音が聞こえた。ジョーは人差し指を唇にあてがえ、音のした方向――エレベーター横の階段を見つめた。

小さな足音――忍び歩きという感じではない。ただ、距離が遠いだけという感じだった。

恐らくは三階から二階に駆け下りる犯人の足音。だが、犯人は少年だったはずだ。そんな遠くからの足音が届くとも思えない。

「後でゆっくり聞こう。今は奴らを挙げる事に集中しろ」

ヤマキは小さく頷いた。

足音を消し、しかし迅速に階段に向かった。ヤマキはやや遅れながらもしっかりとついてきている。

階段を登る前に、左右を確認した。今や見る影もなく破壊された各ブランドのブースが並び、細い通路を象っている。左の方向へ真っ直ぐ、突き当たりをまた左に行けば正面入口。右は真っ直ぐ行け

ば裏口に直結していた。非常口の四角いディスプレイが扉の上で明滅している。

退路はここだけだった。しかも、細い廊下にはやはりいくつもの死体が転がっている為、いざという時の逃走は不利。犯人は自ら逃走経路を遮断した。

「ヤマキ。お前は左に隠れろ」

声を殺して命令する。ヤマキが慌てて壁に背をかけた。

続いてジョーが右側の壁に背をかけた。対面のブースに、髪の長い女がもたれかかるようにして死んでいるのが見えた。

耳を澄ます——足音はどんどん大きくなる。どう考えても巨漢の足音だった。やはり、妙だ。

顔を半分、階段の方に出した。踊場が見える。足音はすぐ近くまで迫っている。

巨大な脚が踊場の縁からはみ出した。ハーフパンツを履いているようで、むき出しの太ももが伺えた。筋肉に溢れていた。

巨漢が全貌をあらわにした。坊主頭の少年の頭と腰を両腕に抱えている。抱えられている少年は今にも死にそうな表情で両手足をだらりと宙に垂れ下げていた。口が裂けて、そのまわりは血でどす黒く汚れている。

巨漢が踊場に立ち尽くした。こちらの方に目を向ける。気付かれてはいない。だが、何かを感じ取っているようだった。

なかなかの手練れ。ヤマキと二人では骨が折れそうな相手だった。

「大兄、よくわかりませんが、誰かいるかもしれません！」

「馬鹿野郎！　さっさと確かめやがれ！」

聞き覚えのある声が踊場の上から響いた。聞き間違えるはずのない、怨敵の声だった。

ロウジ——。

いきなり出会えるとは。ついている。ツキが巡ってきている。

思わず笑みがこぼれた。反対側の通路に、ジョーの笑顔に引きつっているヤマキが見えた。

17、狂狼怨

ボヤジを叩き起こし、生きている方のガキを抱えさせた。

「大兄、これは、大兄がやったんですか」

「そうだ。ぶちのめしてやった。最近のガキは根性がねぇな。一匹は死んじまったよ」

ロウジは薄ら笑いを浮かべて転がっているガキに視線を送った。ボヤジの視線が促されるようにそれに続く。

化け物だったガキの顔——もはや顔と呼べる輪郭をしていなかった。形の悪いジャガイモのように頬は腫れ上がり、こめかみは窪んでいた。目は潰れて見る影もない。鼻は潰れてただの穴になっている。

「やはり、大兄は恐ろしい狼(ひと)だ」

敬意のこもった眼差し。ロウジは鼻を鳴らした。

「これくらいは俺にかかれば朝飯前なんだよ。それより急ぐぞ。ガーディアンの奴らがこっちに向かっているらしい」

「解りました。行きましょう、大兄」

ボヤジが階段へ走り出した。ロウジは松葉杖を拾ってそれに続く。使いものにならない右脚を引きずった。散らばったスーツや瓦礫が松葉杖に引っかかる。ボヤジには強がったが、いまや自分は歩く事

もままならない。ロウジは焦燥に駆られた。
　俺の体が完全に壊れる前に、全てを終わらせなければならない。リナを見つけ出し、スンに殺させ、神狼を上手く利用し、メロウを救い、バラスを殺す。
　ゴールまでは気が遠くなるほどの距離を駆け抜けなければならない。弱気になっている暇はない。気合いを入れ直した。痛みが、先ほどより僅かにマシになった。
　階段に足を滑らせそうになりながら二階へ——スンと合流した。そのままボヤジを先頭に一階へ。途中の踊場でボヤジが足を止めた。
「大兄、よく分かりませんが、誰かいるかもしれません！」
　ジグザグに続く階段。ロウジの位置からまだ一階は見えない。
　ボヤジはロウジに振り返り、申し訳なさそうに首を縦に振った。
「馬鹿野郎！　さっさと確かめやがれ！」
　ゆっくりと、ボヤジが階段を降りていく。ロウジは後ろのスンにも臨戦態勢を促した。スンがナイフを構えた。
　立体の階段を半分まで降りたところで、ボヤジの姿が見えなくなった。何が待ち構えているのか——恐らくはガーディアンウルフ。職務怠慢が奴らの常だとはいえ、これほどの規模の虐殺現場となれば、奴らを撒くのは容易ではないだろう。
　ボヤジとスンがいれば、奴らを殺して逃げるのは簡単だが、しか

し、奴らのバックには三番街のマルコ・ファミリーが控えている。体臭野郎や神浪と張り合おうという時に、ここで余分な敵を増やすという選択肢はいただけなかった。

と、思った矢先――。

「動くな」

下から声が聞こえた。どこかで聞いた事のある声――思い出せない。

ロウジは恐る恐る、手すりから僅かに身を乗り出して一階の様子を窺った。

舌打ち。瀕死のガキを抱えたボヤジが、階段の下、一階の通路の左右から二人の男に銃を突き付けられていた。

ロウジから見て右の男――短髪の太眉毛。小柄。まだ若い。二十歳そこそこといったところか。紺色の制服を着ている。やはりガーディアンウルフだった。

ロウジから見て左の男――横顔しか窺えないが、確かに見覚えがあった。オールバック。灰色のコートを羽織っている。背はロウジより若干高い。年は四十をいくつか越えていそうなところだった。

ボヤジは左右交互に顔を振り、男二人を睨みつけた。

「抱えている少年を降ろせ」

抑揚のない声でオールバックが言った。緊張感は読み取れない。

場慣れしたプロの声だった。
ボヤジは黙ったまま、視線をオールバックに固定した。短髪の若僧から見れば隙だらけだが、何かアクションを起こす様子も見られない。それどころか、オールバックと対照的に、若僧の表情は青ざめ、構えた銃も震えていた。
厄介なのはオールバック。交戦になれば実質三対一。だが、ガキを抱えたまま銃を突き付けられているボヤジを何とかしない事にはどうにもならない。
「聞こえなかったか？　少年を降ろせと言っているんだ」
ボヤジは沈黙を守っていた。膠着状態が続く。
「ロウジさん。私が、退路を切り開きます」
背後からスンの小声。ロウジもか細い声で応答した。
「どうするつもりだ？」
「私がナイフをオールバックの拳銃に投げつけます。奴の武装を排除すれば、右側の男はボヤジの一蹴りで何とでもなるでしょう。ボヤジには左へ走れと叫んでください。非常口があるはずです」
「……狙いを間違えるなよ。奴らを殺すと、後で厄介だ」
スンは鼻で笑った。
「私とナイフは何者よりも強い信頼関係で結ばれている。ナイフ

が私の意図に反する軌道をとる事は有り得ない」

ナイフが親友――さすがに変態のサイコ野郎。この局面では何よりも頼りになる。

「任せた。次にオールバックが口を開いた時が合図だ」

オールバックが口を開くのを待つ。一秒が一分に、一分が一時間に感じられる。終わる事のない膠着状態に極度の緊張感、さらには狂狼剤の副作用か、徐々に頭に熱が宿ってきた。視界がぼやけ、脂汗が全身から滲みでてくるのがわかる。

吐き気――堪える。狂狼剤が欲しい。あの快感を蘇らせたい。ロウジは首を振った。

化け物にはなりたくない。

『あんたは化け物よ』

レンの幻聴。

『お前は化け物だ』

オウキの呪詛。

亡霊の声が頭の中で大きくなる。熱が比例して上がっていく。体がだるい。耐え難い。しかし耐え忍ばなければならない。何もかもは愛しき娘、メロウの為に。

永遠と錯覚するほどに長い膠着状態――唐突にオールバックが口

を開いた。

「お前も聞いてるんだろう、ロウジ？　この巨漢に、少年を降ろせと命令してくれないか」

頭痛が吹き飛ぶ。全身から汗がひく。何故俺の名を――疑問に答える者はいない。トン、という音が背後でした。スンが踊場に、正確には踊場の壁に跳んでいた。宙で体を反転させ、壁に足をつける。それと同時にナイフを投げ、スン自身も蛙のように、両脚を折り曲げ、反動で一階へむけてさらに跳躍した。

刹那の動作――スンのナイフに気付いたオールバックは瞬時に後退し、バットを振るように銃身でナイフを打った。金属音。もう一本のナイフを構えたスンがオールバックに迫る。銃口がスンに向けられる。

「スン！」

届かぬ叫び――響く銃声。

ロウジは踊場に飛び出した。スンが鞄屋のブース、ショーケースに頭から突っ込んでいた。ボヤジが若僧の腹を蹴飛ばした。意識的にか無意識か、仰け反りながら反動で若僧が銃を撃った。弾は天井に当たったらしく、幸い跳弾はなかった。

オールバックが踊場へ、ロウジに銃口を向けながら駆け上がってくる。鬼神の如き表情。この世の憎悪を全て吸収したかのように歪んでいた。そして、その憎悪は全てロウジに向けられていた。

記憶が奔流する。この男の名前はジョー。数年前に、とある出来

事からロウジはこの男の妻と娘を強姦し、殺した。

「大兄、危ない！」

ボヤジが叫ぶ。

「馬鹿野郎！　てめぇはさっさとガキを連れて逃げろ！」

ボヤジはうろたえながらも、左へ向かって走り出した。すでに、ジョーは踊場へ登り、銃口はほとんど零距離射程でロウジの額に向けられている。

「久しぶりだな。ロウジよ」

暗い笑みを携えて、ジョーは言った。

「会いたかった。愛情と履き違えそうになるほど、俺はお前に会いたかったよ」

銃口が額に押し付けられる。化け物の次は鬼神。疑う事なく、ロウジを取り巻く世界は無間地獄に浸食されていた。

「俺は、出来ればもう少し元気な時に会いたかったぜ」

ジョーの視線がロウジの頭からつま先へ、ゆっくりと移動していく。

「まさしく、満身創痍か。お似合いだな」

「あんたにとっちゃ、残念ながら随分と都合がいいみたいだ」

「そのようだ。出来る事なら、この場で、お前のその腐った脳みそをぶちまけてやりたいところだがな。あいにく、お前には随分と聞きたい事がある。復讐はゆっくりとさせてもらう事にしよう。本部でな」

どうする――オーバーヒート寸前の頭で考える。この場で捕まれば、何もかもがおしまいだった。ロウジの利用価値に見切りをつけたバラスは簡単にメロウを殺すだろう。破滅が目の前に迫ってきている。

「手を挙げろ」

抵抗――出来るはずもない。万全の状態で張り合っても、ジョーが相手ではかなり手こずる。今は右脚の負傷に狂狼剤の副作用。勝機は零。

「悪いが、見ての通り脚がやられちまってるんだ。松葉杖で支えてないと、立つ事もままならない」

出来る事――時間稼ぎ。無駄な話で破滅を引き伸ばせ。今は天啓が降りてくるのを待つ事しか出来ない。

「片腕で構わない。くだらない事を喋ると次からは予告なしで撃つ。いいな」

舌打ちを堪え、言う通りにした。

「そのまま、後ろを向いて、片腕だけで構わないから壁に手をつけ」

無駄口を考えたが、少しでも反抗すれば撃たれるのは明白だった。ジョーは恐らく、この世界で誰よりもロウジを怨み、誰よりも憎み、誰よりも呪っている。

壁に手をつく。天啓は降りてくる気配を見せない。

「やれやれ。随分と丸くなったもんだな。少しは反抗してみせたらどうだ？」

心底楽しそうなジョーの声。あまりの屈辱に歯を噛み締める——直後に激痛。右脚のふくらはぎを蹴られた。

「痛いか？」

歯を食いしばる——もう一度蹴られる。撃たれた傷が開き、ズボンの裾から血が滴り落ちてくる。

「アンリとミキの痛みは、こんなものじゃなかった」

さらにもう一発蹴られた。ロウジは絶叫し、手をついたまま、膝から崩れ落ちた。

間髪いれず、今度は頭を踏みつけられた。うつ伏せになったロウジは、そのまま、何度も何度も踏みつけられた。

「アンリとミキの屈辱は、こんなものじゃなかった」

アンリ——ジョーの妻。ミキ——ジョーの娘。

アンリを縛り付け、まず、ミキを犯した。ミキの中に精子をぶちまけると、今度はミキを縛り付け、母親の蹂躙される姿を存分にミキに見せ付けた。泣き叫ぶ二人を全裸で背中合わせに縛り付け、小便をかけた。そして交互に殴りつけた。十回繰り返したところでアンリが死に、二十回でミキが死んだ。

ロウジがレンを殺してから、一週間目の出来事だった。

「ろくでなしのお前を、アンリは手厚く看病した。ミキは優しく介抱した。その結果、二人はお前になぶり殺された」

思いきり頭を蹴られる。脚を蹴られる。腹を蹴られる。背中を蹴られる。顎を蹴られる。

痛みが緩慢になっていく。意識が曖昧になっていく。薄れゆく意識の中、ロウジは呟いた。

体臭野郎をぶちのめす。体臭野郎をぶちのめし、淫売リナをぶち殺し、そしてこの俺を踏みにじりやがった糞野郎を、最悪に残酷な方法でなぶり殺してやる。

意識が、音をたてて途切れた。闇の中で、メロウが膝を抱えて、父の救済を待つ姿が見えた。

18、孤狼夢

あてどもなく、闇をさまよっていた。レンがオウキと寝ていた——信じられなかった。レンを殺してしまった——信じられなかった。

「私は誰も愛してないわ」

「生きる為に、あんた達を利用しただけ」

明滅を繰り返す壊れかけた電球の下、レンの表情がグロテスクに発光しているように見えた。

「セックスはオウキの方が上手かったわね」

レンの首を、締めながら、ベッドに押し倒した。レンは抵抗しなかった。レンの顔から血の気が薄れていく。生命の灯火が完全に消え去るその間際、最後の一瞬、レンの唇が再び動いた。

「不器用な人」

レンは死んだ。

外は土砂降りの雨だった。数多の水滴が激しくアスファルトを打つ音が聞こえる。闇を歩いた。オウキが立っていた。

「レンは?」

「お前こそ、メロウはどうした」

「もう眠った。ホテルで鼾をかいてる」

「……何故、レンと寝た？」

オウキの表情は一瞬だけ揺らいだが、すぐに平静を取り戻した。

「お前にはすまない事をしたと思ってる。でも、知っていただろうが、俺だってメロウを愛してたんだ」

拳を握る——血液が拳の中で逆っているのがわかる。

「だから、俺を裏切りやがったのか」

「悪かったな。もう二度としない」

拳を握る。あまりに力を込めすぎて、爪が掌に食い込んでいた。血が拳から、雨の滴と共に滴り落ちた。

「レンはもういねぇ」

「なに？」

「さっき、殺した」

「……そうか」

拳を握る——拳を振るう。オウキのこめかみを完全に捉えた。

「お前のせいだぞ、お前が、お前らが俺を裏切るから！」

オウキは左膝を折ったが、倒れるには至らず、再び体勢を正し、暗い瞳でロウジを見据えた。
「先に裏切ったのはお前の方だろう、ロウジ。お前は俺の気持ちを知りながら、俺の目を盗み、レンを寝取った」
寝取った、という言い方が気にかかった。しかし、頭に血が登ってそれどころではなかった。
「お前の気持ちだと？　冗談言うなよオウキ。お前がレンに惚れてたなら、何でもっと怒らねぇ？　何でお前はそんな冷静でいられるんだ」
「知っているだろうロウジ。俺はこういう狼なんだよ」
オウキ――長年の連れ合い。物心ついた時から、ずっと一緒に育ってきた。唯一の親友。しかし、にも関わらず、この男が感情を露わにする場面を見た事がなかった。いかなる時も冷静沈着。何を考えているのか解った試しが一度もない。
「そして、レンもな」
言外の意味――お前だけが、仲間外れなんだよ、ロウジ。
「糞野郎！」
ロウジはオウキを殴った。オウキはロウジを殴った。二匹の狼は殴り合った。雨は、益々強く降り続けた。

水滴が窓ガラスを叩きつける音で目が覚めた。頭が重い。激しい頭痛。体中の痛み。起こそうと思った体が全くいう事を聞かない。

首だけ、何とか起こして周囲を窺った。汗臭い匂いが鼻をつく。目の前にはダンベルが二対、テーブルの上に置かれていた。さらにその奥にはランニングマシーン。窓の外は大雨らしく、曇りきっていて情景がつかめない。

右を見た。天井に届きそうなほど高い二段ベッドがある。ベッドの二階の縁に、大男が両手でぶら下がっていた。背中、タンクトップの両肩から、はちきれそうな筋肉がはみ出している。

筋肉馬鹿が懸垂をしていた。

「ボヤジ」

ぶら下がったまま、ボヤジが首を回した。安堵に満ち足りた表情でロウジを見下ろしている。

「大兄、目覚めたんですね」

目覚めたのは見ればわかるだろう――筋肉馬鹿はいちいち無駄な言葉が多かった。

「何が、どうなりやがった？」

「覚えてないんですか、大兄？」

頭痛を押し殺し、記憶を辿る。

リナを捜す手掛かりを得るべく、神狼の売人を炙り出す作戦を敢行した。

その為に、まず、セントラルストリートで狂狼剤をキメているバカガキを捜索――ボヤジとスンが見つけた。

バカガキは狂狼剤で化け物に変わる。イルマで一騒動。バカガキを一匹殺し、一匹捕らえた。

同時にガーディアンウルフがやってくる。とんずらをしようとしたところに――ジョーが現れ――。

こめかみの血管が熱く脈打っていた。思い出したくもない、屈辱の出来事。ジョーにいいようにぶちのめされた。

「……あの糞野郎はどこへいきやがった？！」

「俺は裏口から逃げ、ガキを車に押し込めました。そのあと、もう一度イルマの様子を見に行ったんです。そしたら丁度、入口から大兄の両足を脇に抱えて引きずってくるあのオールバックが見えたんです」

糞野郎、俺を引きずっただと？　文字通り塵扱いしやがって。赦せない。赦し難い。

拳を床に叩きつけたい。目に止まる家具全てを叩き壊したい。衝動に駆られる。体は動かない。頭が痛い。歯軋りをする事すらままならない。

畜生、畜生、畜生――！

「……大兄、大丈夫ですか？　顔色が悪いですよ？」

「うるせぇ、続けろ」

「は、はい」

何を勘違いしたのか、ボヤジは再び懸垂を始めた。

「懸垂じゃねぇ、話をだ！　この糞筋肉馬鹿が！」

「す、すみません大兄！」

視界がぼやける。極度の疲弊に長年溜められてきた鬱積したストレス。それらが伴ってロウジを破壊しようとしていた。

「てめぇはいつまでぶら下がってやがるんだ！　さっさと降りろ！」

「はい！」

巨漢のボヤジの遠慮がない着地。凄まじい振動が床を通じて布団越しに、ロウジの背中に伝わった。右脚、頭、腹、顎。傷を負っている全ての部位が、赤子のように一斉に悲鳴をあげ始めた。

涙が、出そうになった。目をきつく瞑り、こみ上げてくる絶叫を飲み込んだ。ボヤジはロウジの様子に全く気付く事もなく、話を続けた。

「俺は大兄を助けようと、単身、奴らの前に駆け込みました。数

十のガーディアンに囲まれ、銃を突きつけられましたが、俺は果敢に吠えたのです。大兄から手を離せ、と」

武勇伝のつもりか。くだらなかった。大方、この筋肉チキン野郎は俺が連れさられそうな場面に直面し、おろおろしているところをガーディアンに見つかった、というのが真実だろう。ロウジは侮蔑の視線をボヤジに送った。

「一触即発の空気の中、急にもう一台、奴らの車がイルマの前まで走ってきたのです。出てきたのは女でした。その女がオールバックに近寄り、何かを耳打ちすると、オールバックは女に怒鳴り散らし、どういうわけか大兄を置いて、ガーディアン全員を率いて撤収したんです」

奇妙な話だった。あのジョーが、ようやく捕まえた怨敵であるはずのロウジを、なぜそんな簡単に手放したのか。

「なんにせよ、ラッキーでした。俺は大兄を背負い、車に戻ったんです」

「スンはどうした」

「スンなら、無事です。撃たれる直前、弾道にナイフの柄を合わせ、弾を弾いたそうです」

ロウジは安堵した。スンにはまだ生きていてもらわねばならない。奴には、リナを殺すという重大な役目を担ってもらわなければならないのだ。

「で、スンは今どこにいるんだ」

「狼星と供に、パラダイスの地下室でガキを拷問しています。多分、すぐに神狼の売人の詳細を吐くでしょう」

「なる程な。俺達には、何か体臭、いや狼星から指示はあるのか」

「大兄が目覚めるまで俺の部屋で待機。目覚めたらすぐに、捜索を再開するように。連絡は追っていれるそうです」

どこまでも俺をこき使う気でいる体臭野郎。この体で捜索も何もあったものではなかった。ロウジは目を閉じた。

体臭野郎がガキを拷問しているという事は、伝えるまでもなく、狂狼剤の売買がパラダイスで行われていたという事を知るのは時間の問題だろう。

それを知ったバラスは、益々怒り狂い、ロウジに発破をかけてくる。今より、一層ロウジに追い込みをかけるだろう。

状況はさらに厄介だったが、ロウジには一つ確信があった。

神狼のスパイが狼星会に紛れ込んでいるという事だ。

いくら雑多な種類の狼が集まる巨大なクラブ、パラダイスといえど、その監視体制には隙がない。

客には秘密で、あらゆる場所に監視カメラを仕掛けてある。トイレも例外ではなかった。もし、狼星会以外の売人がパラダイスの中で狂狼剤を捌いているのなら、今日まで見つからないわけがないのだ。誰か内部の狼が手引きをしない限りは。　雲を掴むようなリナ

の捜索だったが、狼星会にスパイがいるのなら、炙り出すのは大して困難ではない。パラダイスの監視に携わっている狼は、数えるほどしかいないのだから。

「ボヤジ。俺は手が動かねぇ。今から言うことを狼星に電話で伝えろ」

ロウジは今し方頭の中でまとめた推測をボヤジに話した。

「……まさか、狼星会にスパイがいるなんて」

青ざめた表情でボヤジが言った。

「だがな、事実なら事態はもの凄い進展を見せるんだ。解るだろう」

「は、はい」

ボヤジが携帯を手に取ろうとした瞬間、ロウジの携帯が鳴った。ロウジはボヤジに自分の携帯を取らせ、ディスプレイを確認した。それは、イルマで化け物と遭遇した瞬間にかかってきた番号と同一のものだった。

「出るぞ。携帯を俺の耳にあてがえろ」

ボヤジはそそくさと従った。

「やぁ、元気にしてたかい」

聞き覚えのある声――バイク野郎の声が耳に響いた。

19、拷問

拷問とセックスは、バラスにとって、ほとんど同じ意味合いを持っていた。

どちらも、痛めつける。誰かを壊れる寸前まで痛めつけ、それがもたらす快感を存分に味わう。射精は結果に過ぎない。相手が崩壊していく過程が何よりも大事だった。

暗い、部屋だった。石造りの壁が、淡い光を放つ裸電球に照らされている。

天井の梁に括りつけた鎖の手枷を、ガキの両手にはめて、吊らした。ガキは全裸にしてある。隣では、スンがナイフの刃を舐めているところだった。

ガキの目は、光を失っていた。裂けた口の端の傷跡が、見た目にも腐っているのが判る。あと、一日ほうっておけば、ウジが沸き始める。もっとも、このガキがそれまで生き長らえるとは思わないが。

パラダイスの地下室——拷問部屋。もしくはバラスのプレイルーム。普段は、男ではなく女を吊す。抱くのに飽きた女を、ここに吊して、長い時間をかけて、いたぶる。女の精神が崩壊するころには、女の体の部位はほとんどが損なわれている。

ロウジがすでに、ガキを痛めつけていたらしく、余り長い時間をかけての拷問に耐えられる体力は残っていないようだった。バラスはスンに命令して、ガキの両乳首を切り落とさせた。

絶叫が、部屋に反響した。

「さて、小僧。覚えてねぇは通用しねぇ。つまり、ノーは駄目だ。これから俺がする質問に全力で答えろ。もし、知らないとでもぬかしやがったら、それが嘘だろうと本当だろうと、てめぇの体をどこか切り落とす。こいつがな」

スンの股間に目をやった。膨らんでいる。

「さっき、水はたらふく飲ませてやったろう。もう、喋れねぇわけじゃあるまい」

ガキは瞳から涙を、乳首のあった場所からは血の涙を流しながら、小さく

「はい」と首を縦に振った。

「よし、まずはお前の自己紹介だ。ってもお前の名前なんざいらねぇ。入ってたチームの名前を教えろ」

「ナ、ナイトウルフです」

ナイトウルフ――二番街でも一番規模のデカいストリートギャングの名前だった。ヘッドには、暴狼剤の購入は狼星会仕様のもののみに限定しろと、キツい通達を出したはずだ。

バラスは壁を蹴った。部屋全体に振動が伝わる。ガキの表情はみるみる青白くなっていく。

「まったく、ガキってのはだから好かねぇ。面と向かって喋りゃあ、しつこいくらいにへつらうくせに、陰じゃこっちの命令なんざ

屁とも思わねぇでシカトこきやがる。そんなバカガキにはよ、お灸が必要だよなぁ。なぁ、スン？」

「狼星の仰る通りです」

スンは心底嬉しそうに答えた。ガキの体を切り刻めという命令を、いまかいまかと待ち焦がれているようだ。

ガキは体を揺らして恐怖を示した。鎖がジャラジャラと音をたてるだけだった。

「骨折れてんのにまだ元気あるじゃねぇか。まぁいい。すんだ事はしかたねぇ。それじゃぁよ、次の質問いくぜ。お前ら、例の暴狼剤、てか、狂狼剤だな。あれの存在をどこで知りやがった？」

「う、噂が流れたんです。見たこともない売人が、無茶苦茶安く暴狼剤を捌いてるって」

ここまでは、調査済みだった。街のバカガキ共は、どこからか流れた噂に踊って神狼の売人に辿り着く。

「噂は、どこの誰が流した？」

「わかりま……」

言いかけて、ガキは口をつぐんだ。バラスの目が細くなっているのを見逃さなかった証拠だった。

「あの、あくまで俺達はですけど、集会の時に、ヘッドがみんなに伝えたんです」

「お前らの頭は、ゴウラだったな」
「はい。ゴウラが、二ヶ月前の集会の時に、急にみんなに伝えて」
二ヶ月前――狂狼剤が二番街に横行しだしたのはまさにこの時期。ガキ共の噂はガキ共が操っている。とすれば、答えは自ずと見えてくる。
「へぇ。それでよ、売人はどこで狂狼剤を売りさばいてたんだ？」
「街の、遊び場全域です。ゲーセンとか、カラオケとか……」
微かだが、ガキが何かを言い淀んでいるような気配がした。バラスはスンと視線を合わせてから、ガキに顎をしゃくった。
水を得た魚のように、スンが舌を出して歓喜の雄叫びを上げたと思うと、次の瞬間にはガキの左耳が飛んでいた。血が吹きだした。絶叫が再び部屋に響いた。
「言ってなかったけどな、躊躇もダメだ。俺は気が短けぇんだよ」
バラスはガキの頬を軽くはたいた。ガキは大声を上げて泣き叫ぶだけだった。
「うるせぇなぁ。こら、小僧。二秒で泣き止め。泣き止まねぇなら右耳も切り落とす」
ぴたりと、泣き声が止まった。ガキは喉を痙攣させせながら、鼻をすすっている。

「よしよし、いい子だ。可愛いとこあるじゃねぇか。じゃあよ、教えな。売人がブツ捌いてんのは、他にどこよ」

「こ」

「あ？」

「ここです。パラダイスです」

ガキが言っている事がにわかに理解出来なかった。パラダイスで、狼星会以外の売人が、ブツを捌く？　あってはならない事態だった。シノギ云々の問題ではない。狼星会の、つまりはバラス自身の面子に関わる大問題だ。

「……小僧、嘘じゃねぇんだな」

「はい」

「じゃあお前は、パラダイスで狂狼剤を買ったのか？」

口づけをかわせそうな距離で、バラスはガキを睨み付けた。あまりの恐怖感からか、ガキは小便を漏らした。

「二秒で答えろ。パラダイスで買ったのか？」

「か、買いました。すみません！」

ガキは泣いた。小便の生臭い臭気が下から徐々に漂ってきた。

「薄汚ぇ、ゴキブリが」

バラスは大きく息を吸った。

「スン！　このゴキブリのマラを切り落とせ！　ゴウラの奴に送りつけてやるんだ。次はお前もこうしてやるってな！」

スンがガキのペニスの付け根に、刃をあてがえた。ガキは目を見開いて、声にならない叫びを上げた。

スンが口の端を吊り上げて笑った。ボト、という音が聞こえた。

ガキは幸運にも、ペニスを切り落とされる直前に、ショックでくたばったらしい。悲鳴は聞こえなかった。石の床が、ガキの小便と血で赤黒い池をつくっていた。

「糞が、どこまで俺を舐めりゃあ気が済むんだ、神狼の糞野郎どもは」

バラスは死体になったガキの顔面を思い切り殴りつけた。吊られた死体はブランコのように宙で揺れた。

「スンよ、お前、今の話を聞いてどう思う」

「私は、ゴウラが臭いと思います。どうも、狂狼剤を捌く売人の噂というのは、作為的なものを感じる。奴が神狼の犬である可能性は高いんじゃないでしょうか」

「だろうな。なら、することは一つしかねぇ」

「ゴウラをさらいます」

「おう。一刻も早く、リ……」

リナを助けるんだ、という言葉を飲み込んだ。マフィアの長が、たかだか娼婦一人の為に組織全体を動かすわけにはいかない。そして、リナがたかだか娼婦ではない、ということを自分以外の何者にも知られてはならない。

「……神狼をぶっ潰すんだ」

「かしこまりました」

スンは深々と頭を下げた。

携帯の着信メロディーが聴こえた。スンがポケットから携帯を取り出し、ディスプレイを確認する。

「狼星、ロウジですが」

ロウジ——あの大馬鹿野郎、ようやく目覚めやがったか。

なかば奪いとるようにスンの携帯を取り、通話ボタンを押した。

「こら、ロウジ、ようやく目覚めやがったか」

「あぁ、ボスですか。すみません。ガーディアンに性格の悪い奴がいましてね。派手にやられちまいました」

「言い訳はいいんだよ。てめぇ、何か手掛かりは見つかったんだ

ろうな」

「多分、ボスのことだから、もうガキから聞き出してるとは思いますが、売人が狂狼剤を捌いてた場所、ちょっと不可解なところでね」

「あぁ。うち〈パラダイス〉だろ」

「さすがに早い。ってことは、ですよ、ボス。狼星会にスパイがいるって、そういうことにはなりませんか」

「あぁ？」

狼星会に神狼のスパイが——可能性は零ではないが、限りなく零に近い。

何故なら、バラスは知っている。バラスが狼星会の頂点に立っている一番の理由は、構成員がスンのような変態を除いて、バラスを恐怖しているからに他ならない。

バラスは、恐怖こそが下に仕える者にはめる一番の首輪だと信じている。だからこそ、パフォーマンスの意味合いも含めて、バラスは努めて横暴に、残酷に振る舞ってきた。その甲斐あって、部下の自分を見る目には、常に怖れによる暗い光が宿っていた。

自分を裏切る者がいるなど、考えられない。明確な自信があった。

「有り得ねぇよ。俺を裏切る馬鹿がいるなんてな」

「現実に、狂狼剤はパラダイスで捌かれてるってのに？　ボス。

いつからそんなおめでたい頭になったんです」
挑発的な言葉。頭に血が上る。
「おいこら、てめぇは誰に向かって口きいてんだ」
「ボスですよ。何か？」
「娘がどうなってもいいってんだな」
「また娘ですか。だったら、たまにはメロウの声を聞かせてもらえませんかね。そうすりゃ、俺だってもうちょっと聞き分けがよくなるんですが」
何かが、おかしい。今の今まで、ロウジが娘の話を出して、取り乱さない事はなかった。それが、今日に限ってどうしてこいつは、こうも冷静に軽口を叩きやがるのか。
「そんなに娘の声が聞きてぇなら、大人しく従うんだな、ロウジ。そうすりゃ考えてやらなくもねぇ」
「メロウは、本当にボスの目の届くところにいるんですかね」
ロウジの声から感情が消えた。完璧なまでに平坦で、冷酷な声。かつて、狼星会を壊滅寸前に追い詰めた狂狼の声に戻っていた。
「いるに決まってるだろうが。あの娘は大事な餌だ。お前を自由に使う為のな。その餌を自ら手放してどうするよ」
冷静に振る舞う。何がきっかけかはわからないが、ロウジは真実

に気がつきつつある。真実に気がつけば、ロウジは間違いなく厄介な敵になる。

「まぁ、いいですよ。今はあんたの飼い犬でいる。けど、忘れないでくださいよ。この件が終わったら、俺とメロウを自由にするって話は」

「あぁ。ゼウスの野郎をお前がぶち殺せたらな」

「楽しみにしてます。裏切り者の件については、ボスももう一度考えてみてください。俺は別の線であたります」

「時間はあまりねぇからな。連絡を忘れんじゃねぇぞ」

通話が切れた。

バラスはスンの携帯を思い切り握り締めた。飼い犬に手を噛まれ始めている。いざという時の為に、保険はかけて置かなければならない。

「スン。もう少し携帯借りるぞ」

「もちろんです、狼星」

目当ての番号を記憶の引き出しを開けて、ダイヤルした。コール音が響く。

耳に携帯をあてがえながら、思い出したようにバラスはスンに口を開いた。

「もう、ロウジのサポートはいいからな。お前はゴウラをさらう事に集中してくれや」

スンが返事をするのと同時に、コール音がぷつりと切れ、営業的な女の挨拶が聞こえてきた。

２０、男と男

鍛錬を、かかした事はなかった。それはアンリとミキがロウジに殺される以前から、変わっていない。

だが、鍛錬の意味合いは、変わった。アンリとミキを殺されたあの日から、ジョーにとっての鍛錬とは、自分を鍛え上げる為ではなく、虐めぬく為に存在していた。

三番街、サンセットジム。ビーチの隅っこ、桟橋にくっついたちっぽけなジムだった。

主に、地下ボクシングの選手がここでトレーニングに励んでいる。ウルフ・ロック内には、公式のスポーツは存在しない。あるのは地下闘技場で金持ちの道楽として開催される闇の格闘技のみだった。

もちろん、非合法ではある。非合法ではあるが、ジョーはボクシングが嫌いではなかった。見るのも、やるのも。だから、サンセットジムがその地下格闘技の養成所である事を知っていても、見逃した。その見返りに、ジョーは無料でジムの施設を利用する事が出来る。

雨が、降っていた。かなり強い。台風でも接近しているのか。風も強かった。海は荒れている。

ジョーは浜辺でのロードワークを済まし、ジムに戻った。

ジムには、練習生が、六人ほどいた。二人はサンドバックを打ち、二人は鏡の前でシャドーボクシング。残りの二人は、リングの上で

スパーをしていた。

会長のダンは、リングの下に立って、マットを叩きながら練習生に怒鳴り散らしている。

「てめぇら、腰が入ってねぇんだよ、腰が！　わかってんのか、あぁ？　そんなへっぴり腰じゃ、ゴングと同時に沈んじまうぞ」

六十に近い、はげ親父の怒声がこのジムの名物だった。端から見れば、ただのさえない爺さんだが、この男は、かつて地下ボクシングのチャンピオンに君臨していた事がある。

ダンのトレーニングは厳しい。それは、科学的に見て必ずしも有益と思えるトレーニングではない。どちらかというとダンは、前世代的な、根性を信仰するタイプのトレーナーだった。

だが、ジョーはそんなダンが嫌いではなかった。少なくとも、不条理な男ではない。選手にかける情熱は本物だった。何より、ダンは全ての選手を息子のように愛している。それに気がつかない選手は、辞める。それに気がついた選手は残る。サンセットジムは、そういうところだった。

スパーをしている二人を眺めた。

両方とも、まだ若い。十代後半。片方は坊主頭の金髪。もう片方は対照的に黒の長髪だった。

スパーは、坊主頭が、圧している。ジャブとストレートのコンビネーションラッシュ。長髪はロープ際に追い詰められていた。

坊主頭が、負ける、とジョーは思った。確かに長髪は追い詰められている。しかし、坊主頭が放ったパンチを、長髪は全てしっかりとガードしていた。

坊主頭のパンチが、目に見えて減速し始めた。打ちすぎで消耗している。大振りのフック。長髪が待っていたように頭を低くしてかわし、フットワークでロープ際を抜け出した。

逆に、坊主頭がロープ際に追い詰められた。

長髪が小刻みにショートアッパーを連打した。坊主頭のガードが上がっていく。腹が、がら空きだった。渾身のリバーブロー。坊主頭が崩れ落ちるように倒れた。

「ストップだ！」

ダンはリングに上がり、倒れた坊主頭を揺さぶった。

「ゴウラ、なかなかやるじゃねぇか」

「まぁ、ね」

長髪は得意気な顔でロープに背をもたれている。ストリートでよく見かける、悪ガキの面構えだった。

「最初、手を抜いてたな」

「はなから全力でやったら、十秒持たないよ、そいつ」

「だが、俺は全力でやれと、いったぜ」

「会長、流行んねぇよ、そういうの。客はさ、エンターテイメントを求めてくるんだ。戦いの中にあるドラマをね。俺達選手の役割は、それを上手く演出する事。それに尽きる」

「そういう事を、言ってるんじゃねぇよ」

ダンは立ち上がり、ゴウラと呼ばれた長髪を睨んだ。気に食わないガキだ、とジョーは思った。

坊主頭は立ち上がる気配がない。ダンは坊主頭を指差して叫んだ。

「こいつはよ、来月に大事な試合を抱えてる。確かに、こいつはのぼせ上がってるところがあった。だから、一度鼻っ柱を折ってやる必要があったんだ。その為にお前とやらせた。そのお前が全力を出さないでどうするんだ」

全力でやられたとあれば、根性のあるガキは立ち直れる。今より強くなれる。だが、手を抜いた相手にやられたとあれば、大抵のガキは自信を失い、腑抜けになる。

ガキとは、そういう生き物だった。

ダンは他の練習生に坊主頭をリングから降ろさせ、バケツで頭に水をぶちまけた。目がさめた坊主頭は、いじけたように、しくしくと泣き始めた。

「ったく、見てられねぇな」

ダンはリングを降りて、ドアに向かった。腕を組んでいるジョー

に気がつくと、声をかけてきた。
「来てたのかい、ジョー」
「さっき、な」
「お勤めはどうした？」
「馬鹿げた法案が、思ったより早く発動されてね。おかげで、ようやく捕まえた獲物に逃げられた」
「機嫌、悪そうじゃねぇか」
「あんたも、な」
リングの上から、ゴウラがこちらを見つめていた。ジョーはしばらく視線を合わせていたが、ゴウラが肩を竦めて背を向けると、視線をダンに戻した。
「スパー、見てたか」
「あぁ」
「どう、思う？」
「何が」
「あの長髪よ」
「強い、な」

「他には？」

「強いが、思い上がってる。自分より強い奴と、闘った事のないガキだ」

ダンは寂しそうに笑った。

「そうだよな。その通りなんだ。筋はいいんだが、どうも、性格に難があってよ。練習も、手抜きなんだ。どう怒鳴っても、ちっともいう事ききやしねぇ。ほとほと手を焼いていてな」

大きな、溜め息をダンがついた。いつになく、ダンが小さく見えた。ジョーはダンの肩を叩いた。

「久しぶりに、リングに上がりたい」

「珍しいじゃねか。いつもサンドバックを叩くだけのお前さんが」

「たまに、こういう気分になる。サンドバックじゃなく、生きてる狼と、本気で殴り合いたい気分に、なる」

昨日、ロウジを車に押し込める直前、メイがやってきて、法案の発動を伝えた。ガーディアンウルフがその権限を行使出来るのは三番街のみに限定する。従って、ロウジを本部に連れていく事は出来ない。

久しぶりに、取り乱した。メイを怒鳴り散らしてしまった。メイは相変わらず、涼しい顔でジョーを宥めるだけだったが、本部に戻っても、ジョーは収まらなかった。

デスクというデスクを蹴り飛ばし、パソコンのディスプレイを叩き割った。行き場を失った烈火の怒りが、制御不能で暴れ回っていた。

一晩、自室で、ひたすらトレーニングに励んだ。腕が壊れそうになるまで腕立てをし、腹が壊れそうになるまで腹筋をした。烈火の怒りが、消え去る事はなかった。

可決された日にそのまま発動された法案——迂闊だった。こんな事なら、あの場所でロウジを殺しておけばよかった。ジョーは激しく後悔していた。

誰かをぶちのめしたい、とジョーは思った。誰かをぶちのめして、憂さを晴らしたい。

自分の精神が危険な兆候を迎えているのはわかっていた。だが、そうでもしなければ気が狂ってしまいそうだったのだ。

絶好の、相手を見つけた。

「リングに上がるのは構わねえが、誰とやる気だい。言っちゃ悪いが、あんたはもう年だ。練習生とやったって、勝ち目はねぇぜ」

勝ち目はない。そう思った時に、男は年をとる。ダンは嫌いな男ではないが、老けていた。ジョーはまだ、何かを諦めるほど、年をくってはいなかった。あるいは、諦めてはならなかった。ジョーの年齢は、アンリとミキが殺された日から、止まっている。

「負けると思って、リングに上がる奴はいない。勝つために上が

るんだ」

「憂さ晴らしにゃ、ちょっと危険だと思うがね」

「だからいいんだ。あの長髪の小僧と、やらせてくれ」

ダンは目を丸くして、両手を振った。

「よしなよ、さっきのを見たろう。野郎、生意気だが、腕はうちのジムじゃ一番なんだ。来年にはタイトルに挑める」

「そういう奴じゃないと、闘う意味がない。俺はそういう生き方をしている。そういう生き方で、生きなければならなくなった」

腕がある。生意気。いけすかないガキ。ロウジにはほど遠いが、それでもここでは一番近い。

「……そうまでいうなら、わかったよ。俺はもう、何も言わねえ。おい、ゴウラ！」

椅子に座って、グローブを外そうとしていたゴウラが、面倒臭そうにこちらを向いた。

「何だよ、会長」

「全力出してないなら、まだ力有り余ってるだろ。リングに上がれ。お前と闘いたい男が、いる」

ゴウラが、にやけながら近づいてきた。間近で見ると、体格はほぼ同じ。タンクトップにトランクスという格好だが、筋肉が締まっ

ているのはわかった。確かに、ボクシングでは、手こずるかもしれなかった。

「おっさん、マジで？　マジで俺とやるつもりなの？」

「そういう事だ」

「馬鹿でしょ、マジで。あんたたまにここで見かけるけどさ、全然動きがなっちゃいねぇぜ」

ジムでトレーニングをする時、ジョーは必ず、ジャージを着ている。ジャージの内側には、鉄の塊が縫い付けられている。総重量は三十キロをオーバーしていた。

封印をとく――そういう言い方は、大袈裟かもしれない。しかし、封印というものをとくべき時があるとすれば、それはロウジを取り逃がしてしまった、今以外においてないとも思う。

ジョーはジャージのファスナーをおろし、脱ぎ捨てた。落ちた時、金属の音がした。上半身はシャツだけになった。

ダンとゴウラは、不可解な顔で、ジャージを眺めた。

ダンがジャージを拾おうとした――拾えなかった。重さに、顔が歪んでいる。

「ジョー、お前さん、これ着て今まで練習してたのか」

頷く。ダンが複雑な表情をして、ゴウラを見つめた。

「ヘッドギアの用意をしとけ」

「冗談言うなよ、なんだってこんなおっさんに……」

「ヘッドギアの用意をしとけ！」

ダンの檄が、とんだ。ゴウラは舌打ちして控え室の方へ歩いていった。

「性格悪いな、ジョー」

「そうか？」

「勝てる算段が充分にあったわけだ」

「リングの上じゃ、何が起こるかわからない。若いときのあんたが、それを言わない日はなかった」

「ちっ。男の強さが見抜けなくなったら、終わりだな、俺も」

「誰だって、年はとる」

「年か。嫌な言葉だ」

嫌な言葉——心底、ダンは哀しそうな表情で言った。

「でもよ、この年になって、俺は、若い奴に、あのゴウラってガキに賭けてるところがある。あいつはチャンピオンになる器なんだ。それもただのチャンピオンじゃねぇ。歴史に名前を残すような、グレートチャンピオンだ」

「その、グレートチャンピオンと殴り合える機会を与えてくれた事に、感謝してる」

「やるからには、お前さんはとことんやるんだろうな」

「それが、男だと思ってる」

唐突に、ダンが膝をおり、床に頭をつけた。土下座していた。

「すまねぇ、ジョー。このまま、帰ってくれ」

「会長……」

男が、頭を下げる。ダンは、年をくった。年をくった男の夢を奪えるほど、ジョーは残酷ではなかった。

「頭を、上げてくれ」

「ジョー……」

「邪魔したたな。俺はもう、ここには来ない」

ダンは立ち上がらず、頭を伏せたままだった。ジョーはジャージを拾い上げ、外に出た。

海は、先ほどより遥かに荒れていた。雨は、先ほどより遥かに強くジョーの身を打ちつけた。津波になるかもしれない。

制御不能の烈火の怒り——はけ口を失った。もやもやとした苛つ

きが募っていた。女を抱きたい。唐突に、そう思った。そして、メイを思い出した。

ジョーは溜め息をついた。シャドーボクシングをしながら、雨の浜辺を、走った。

２１、牙（一）

海岸沿いの椰子の木が、次々と倒れていく。本格的な台風の到来。三番街は暴風域に入ったようだ。

空を見上げれば、分厚い灰色の雲に稲光が走り、水滴が不規則なリズムで容赦なく顔面を叩いた。それでも、ジョーは走ることを辞めなかった。

かれこれ四時間は走り続けている。しかし、心の内にある激情が暴風によって冷まされることはまるでなかった。その間、延々と頭の中に繰り返されるフレーズ――ロウジを殺せ。

体温は上がり続けている。必ず、ロウジを殺す。アンリとミキの仇は、俺が必ずとる。

瞬間、ジョーの視界が真っ白になった。直後に轟音。椰子の木の一本に雷が落ちたようだ。

ジョーは浜辺から椰子の木を眺めた。雷によって天辺から真っ二つに切り裂かれ、黒煙を上げている。

ふと、ジョーは思い出した。あの日も、確か、台風だった。忌まわしきロウジが、我が家の敷居を跨いだ日。全ての運命が狂い始めたあの夜も、稲妻から、全てが始まった。

『父さん、今日も遅いの？』

通話口から聴こえてくる二十歳の娘、ミキの声に、ジョーは申し訳なさそうに答えた。
『あぁ。すまないな。どうしても今日中に挙げなきゃならないやつがいる』
『今夜は、台風がひどいって。母さんも心配してるから』
『わかってる。なるべく、急ぐよ』
通話を切ると、運転している同僚がからかい半分に語りかけてきた。
『娘さんかい？』
『あぁ。最近、家がゴタゴタしててね。夫婦仲がよくないんだ。それを心配してか、早く帰れって催促が多い』
『いい娘さんじゃないか』
『まったくだ。血は繋がってないが、俺にはもったいない娘だよ』
『娘さんの為にも、早いとこ、やっこさん挙げちまおうぜ』
やっこさん――狂狼の双生児。ロウジとオウキ。ウルフロック中を荒らし回る極悪盗賊。
マフィアでさえも奴らには恐れをなして近づかない。炎のような暴力の塊のロウジは立ちふさがる敵を問答無用でぶちのめし、氷のような冷酷の塊オウキは悪魔の知能でロウジの暴力を引き立て、コ

ントロールする。

奴らは先日、二番街のラブホテルでレンという女を殺した。情報によればレンはロウジの妻だったはず。妻を殺す狼。狂狼の名にふさわしい悪魔。

その片割れのロウジが、傷だらけの姿で三番街をうろついている姿を目撃したというタレコミが、この二日間で五十件以上ガーディアンウルフに寄せられた。

情報を提供したのは全てマフィア。狂狼の双生児にはウルフ・ロック中のマフィアから莫大な賞金がかけられている。満身創痍のロウジを見かけたとあらば誰もがその首を狙うと思っていた。

ところが、奴らは手負いのロウジにすら恐れおののき、我々ガーディアンウルフに邪魔者を排除させようとした。

マフィアが腑抜けなのか、それとも、それほどまでに狂狼の双生児が大物なのか。ジョーには判別がつかなかった。

ただ一つ、間違いないのは。

そのロウジを我々の手で捕らえたとあれば、ただでさえ失墜しかかっているガーディアンウルフの権威を回復することが出来る。狂狼狩りはマフィア達を黙らせるに充分な名声になるだろう。

舐められっぱなしのガーディアン。力無き正義。名誉挽回のチャンスをみすみす逃すわけにはいかない。

『嵐が近いな。こりゃ、明日から屋根なしで働くおっさんが増え

そうだ』

眉間に皺をよせて、同僚がいった。車は三番街工場地帯に入っている。強風に煽られて木屑やらコンクリート片やらがフロントウインドを叩いていた。

確かに、いまにもトタンの屋根が剥がれそうな工場がいくつもある。ウルフ・ロックでもこの辺りの労働環境は一番街に次いで劣悪だった。

『労働者を哀れだと思うか？』

不意に、同僚が尋ねてきた。

労働者――ウルフ・ロックにおいては貧困層に使われる言葉だった。

対して富裕層はマフィアの幹部や五番街のカジノ経営者に使われる。

ウルフ・ロックには老若男女問わず、誰しもが生涯に一度は確実に耳にする格言がある。

《命を差し出せば金を。誇りを差し出せば生を得られる》

今でこそ、ある程度職業の取捨選択が可能になったウルフ・ロックだが、十数年前までは完全にこの言葉通りの世界だったのだ。

金を求めるならば、常に命の危険が伴うマフィアになるしかない。安全な生を得たければ、マフィアの靴を舐めながら、劣悪な環境で

肉体を酷使し労働に励むしかない。

ここいらで働く労働者は、その時代から出遅れた者達だった。ウルフ・ロックにおける工場の七割はマフィアが運営している。彼らは現代の最低賃金の半分以下の給与で働き、すり減っていく。搾取では生ぬるい。これはもはや強奪だった。

『哀れだな』

『ほう、言い切るな』

『彼らがじゃないさ』

『なら、誰が？』

『俺たち【ガーディアン】だよ』

結局のところ、ガーディアンウルフもその労働者達と変わらない。三番街を取り仕切るマルコ・ファミリーの下部組織であるのだから。マルコ・ファミリーの靴を舐めて存続しているのだから。

ガーディアンウルフが振りかざす正義など、所詮はマフィアの大義名分に過ぎない。ウルフ・ロック全体の自治という名目で法律を味方につければ、少なくともマルコ・ファミリーは安定する。相当な恨みを買わない限りは、他のマフィアの抗争に巻き込まれることなく、自分たちの仕事に没頭出来るのだ。

『俺たちも、単なる飼い犬に過ぎないってことさ』

同僚は煙草をくわえ、火をつけた。

『だが、生きる為には仕方のないことだろう』

『牙のない狼に、生きる価値があると思うか？』

ジョーは降りしきる雨の、水滴の一粒一粒を見つめながら呟いた。
同僚の吐いた紫煙が、少し目に染みる。

『生きる価値を問うよりも、実際に生きていかなきゃならんのさ。お前にもおれにも家族がいるだろう？　守らなければならない者の為なら、おれは牙なんぞいらんよ』

雷鳴が聴こえる。雨は一層強くなった。

違うな、とジョーは思った。

何かを守るために牙がいるんだ。

『無駄話が過ぎたようだな』

『確かに。それじゃ、おっかない狼の牙を引っこ抜いてやるとするか』

同僚はいくつも点在する工場の中から、比較的（まとも）な、嵐の中でも、なんとか寝床になりそうなものを選んで、その付近に車を止めた。

車を降りると、凄まじい風と雨で、目を開くことすらままならなかった。言葉は風に連れ去られ、意志疎通も満足に行えない。

なんとか、工場に入る。薄暗い。暴風で建物がきしむ音が耳に不

快だ。ジョーと同僚は懐中電灯を点け、お互いの立ち位置を確認しあう。

同僚が入口の確保、ジョーが工場内の捜索という役割分担になった。

割と、奥行きのある工場だった。中心に、天井から巨大なポンプのような装置が吊り下げられ、そのポンプの足元にはベルトコンベアーが工場中を縦横無尽に走っている。当然ながら稼動はしていない。

何か、鼻をつく匂いがする。足を止め、同僚に目配せした。

『ガソリンだ』

瞬間、ベルトコンベアーに炎がたった。一瞬で視界が明るくなる。目をつむる——つむるなと自分に言い聞かせる。

工場の端、視界の片隅。何者かの影。こちらにむかって走ってくる。近付くにつれて、凶悪な面構えがあらわになる。

瞼は腫れ上がり、両頬に蛇のようなみみず腫れが二匹ずつ。額はぱっくりと割れたままで、乾いた血が目元まで張り付いていた。

ボロボロのシャツにジーンズ。体格は互角。武器は所持していない模様。戦力の差を計算——人数分、こちらが圧倒的優位。

『いきなり見つかったな、双生児』

ジョーは口の端を釣り上げて笑い、恐らくはロウジである男に、

拳を構えた。

22、牙（二）

拳を受けてみる——痛み。激しくもなく、緩やかでもない。

拳を打ってみる——頭を低くしてかわされ、その姿勢のまま頭突きを腹に食らった。

しかしジョーもその攻撃は予測の範囲内。鍛え上げられた腹筋に、あらかじめ力を込めてあった。

『てめぇ、鉄板でも仕込んであんのか』

『鍛錬さ』

右足でロウジとおぼしき男の脇を蹴り上げる——脇で右足を挟まれる。

『どこのマフィアの野郎だ』

『マフィアじゃない。俺はガーディアンウルフだ』

『は、腑抜けのガーディアンかよ。何のようだ』

『決まってる』

腰に差してある銃を抜く——ロウジがジョーの右足を解放した。後ずさるロウジの額に銃口を合わせる。暑い。燃え盛るベルトコンベアーによって周囲の気温は上昇を続けていた。

『お前を挙げにきた』

ロウジは忌々しそうな表情で唾を吐いた。

『くだらねぇ。どうせなら殺しにきやがれ』

肝が座っているというより、自棄になっているという印象の方が強い。本当にこいつが、ウルフ・ロック中のマフィアを震撼させた狂狼の片割れなのだろうか？

『死にたいのか、お前？』

引き金に指をかける——ブラフ。この男を見極めておく必要がある。

『死ぬのはいつだって、俺の前に立ってる奴の方だぜ。知らなかったか？』

オレンジの炎に照らされたロウジの笑み。悪鬼のようだった。なるほど。自信はあるようだ。少なくとも、銃程度で自分が殺せるわけがないという自信は。

銃というのは相手の力量を計る上で、もっとも信頼のおけるツールだった。いかに強固な虚栄も、一撃で自分が殺される可能性を前にすれば、即座に吹き飛んでしまう。幾多の修羅場を潜り抜けた者のみが、幾多の死線を生き抜いた者のみがそれを前に平静でいられる。

『面白い』

ジョーは銃を燃え盛るベルトコンベアーに放った。同僚が驚愕の声をあげる。ロウジは不可解そうに眉をひそめた。

『てめぇ、何を考えてやがる？』

『お前を、挙げることだけだ。生かしたまま、な』

『舐めやがって』

舐めているわけではない。その力量を認めただけだった。《生きたまま》挙げる相手に、本気で殴り合ってみたい相手に対して必要なのは、血の通わない鉄塊ではなく、血潮が迸る拳と決まっている。

どのように極悪な狼であれ、それが《孤高》である限り、狼らしくある限り、敬意を示して闘う。

それがジョーのやり方だった。

『かかってこい、狂狼』

言い切る前に、ロウジのかかとがジョーの頭上を捉えていた。両腕をクロスさせ、受ける。重い衝撃。鈍器で殴られたような錯覚。腕の痺れ——鍛錬で培った精神力で誤魔化せる範囲内。

反撃——左腕に乗ったままのロウジの右足首を右手で掴み、そのまま膝を鳩尾にいれてやる。

鉄板でも仕込んでいるのか——先ほどのロウジと同じ言葉を奴の腹筋にかけたくなる。

『やるな』

『てめぇも、ガーディアンにしちゃぁあな』

不敵に笑う狂狼。小手調べの終わり。お互いの本領発揮の時は来た。

実直に、あるいは愚直に、殴り合ってみる。体の熱に呼応するように、炎はいまや、工場中で燃え盛っていた。

『くそ、暑いな』

何発目かの拳を顔面に受け、間合いを取りながらロウジが漏らした。

『お前がつけた火種だろう。愚痴る前に、かかってこい』

『何言ってやがる？　火をつけたのはてめぇらの方だろうが』

心底腹立たしげにロウジが怒鳴る。違和感——熱が急速に冷却されていく。嫌な予感。

ロウジにかけられた莫大な賞金。ガーディアンに寄せられた数多くのマフィアからのたれ込み。腐敗していくガーディアン。そしてもう一つの要素。

ガーディアンとしての直感が、それらを瞬時にまとめ、脳内にあるストーリーを構築させる。

だとすれば——。

『伏せろ！』

叫びと銃声が重なる――ロウジの右肩から鮮血が噴き出すのが見える。

肩を抑え、うずくまるロウジ。表情は歪んでいる。痛みによるものではなく、不意打ちに対する憎悪によってだった。この状況に恐怖を感じることなく、呪いのみを振りまく狼。これこそ、狂狼たる由縁。ジョーは場違いとは思いつつ、そのあまりの狂気に、感心さえしてしまいそうな自分をたしなめた。

『糞が、やってくれるじゃねぇか』

狂狼の憎悪はジョーに向けられる。工場の炎がどす黒くなったような錯覚に陥る。

『殺してやる。生きたままてめぇのはらわたを引きずりだし、それをてめぇのネックレスにしてから、けつの穴を銃で打ち抜いてやる！』

罵詈雑言。言う相手を間違えている。ジョーはロウジには耳を貸さずに、同僚に振り返った。同僚の横に、もう一人、狼が立っている。

オールバックにサングラス。白いセーター、赤のスラックス。馬鹿みたいに太い金のネックレス。右手には硝煙を登らせる銃が握られていた。

間違いなく、マフィアのヒットマン。

ジョーは同僚に平坦な声をかける。

『これも、生きる為に必要なことか？』

『マフィアとの癒着がか？　その通りだよ。ガーディアンの安給料だけじゃ、子供を遊園地に連れていくことも出来ない。結局、おれ達とマフィアは持ちつ持たれつなのさ。そいつを殺せば、莫大な賞金を手に入れることが出来る。いわばサイドビジネスだ。おれに限らず、ガーディアンの誰もがやってる。誰もがこうやって大切な者を幸せにしていくんだよ』

おおよその筋書きはこうだった。

マフィアからの五十件のタレコミのうちの一つ。ロウジにかけられた賞金の折半。ガーディアンの役目――ロウジを殺す隙を作ること。マフィアの役目――ロウジを殺すこと。同僚は二つ返事で快諾する。

この工場にロウジがいることはすでに同僚に伝達済み。ジョーを伴い、偶然を装って捜索。炎の点火を合図に、ロウジとジョーを争わせ、疲弊したロウジを殺害する。

『お前は糞がつくほど真面目で有名だからな。利用させてもらったんだよ。悪く思うな。当然、一割はくれてやるさ』

それは当たり前のこと。当然、同僚から罪悪感を汲み取ることは出来はしない。同僚は、ヒットマンに顎をしゃくった。ヒットマンがロウジに近付いていく。ジョーは、立ち塞がる。立ち塞がることが当たり前だった。立ち塞がる者こそガーディアンだった。

『邪魔だ』
『おれ達はそもそも、お前たちの邪魔をするために、在るんだよ』
拳を、ヒットマンの顔面にめり込ませる。倒れたヒットマンから銃を奪い、そして、それを同僚に向ける。
『誇りを、牙をどこへやった？』
『そんなもののために、貧困に喘ぐ必要があるかよ』
『消えろ』
『ふん、上に報告するか？　無駄だよ。さっきも言ったろう。誰もがやってるんだ。おれにお咎めはないし、誰も何も変わらない。むしろこいつがいるマフィアからお前が狙われる羽目に――』
引き金を絞る。同僚の頬をかすする銃弾。凍りつく同僚。
『消えろ、と言っている』
侮蔑に顔をしかめながら、同僚は逃げるように工場を出た。
天井から瓦礫が落ちてくる。すでに工場は全焼寸前だった。炎の中心にうずくまるロウジを見据える。息遣いを乱していた。顔色も悪い。大分失血しているようだ。
放っておけば死ぬだろう。そして、放っておくべきだ。内なる声の囁き。

それを打ち消す。それが誇りを活かすということ。ガーディアンである前に、一人の、狼であること。

ジョーはロウジに歩み寄った。肩を差し出す。

『何の、真似だ』

『身内の不祥事でお前を死なせたら、俺の中にある誇りも死ぬ。安心しろ、これは貸しじゃない。さっさと、掴まれ』

ロウジは束の間微動だにせず、ジョーを品定めするような目で眺めていたが、やがて、ジョーの肩に手をかけた。

２３、一度きりの吐露

ロウジを助手席に放りこみ、ステアリングを握った。サイドミラーには平坦になった工場が黒煙を上げているのが見える。暴風雨は弱まるどころか、ますます強くなってきた。

ロウジの息遣いが加速度的に荒くなっている。血色も悪い。放置すれば緩慢な死が待っているだけだろう。

『狂狼』

『なん、だ』

『今からお前を、病院に連れて行く』

肩を抑えながら、ロウジはドアを蹴とばした。アクセルを踏む。反動で背もたれに背中を打ちつけたロウジは、悪魔を見る目でジョーを睨む。

『おろしやがれ、ガーディアンなんぞに捕まってたまるかよ。まだくたばった方がましだぜ』

『そうだろうな。おれも、それはフェアじゃないと思ってる』

車を走らせながら、ジョーはミキに電話をかけた。

『……もしもし』

『俺だ。母さんは？』

『寝ちゃったわ。もう、十二時を回ってるのよ？』

ミキは明らかに不機嫌だった。無理もない。本来なら今日は家族で二番街のレストランへ食事に出掛ける予定だったのだ。

もちろん、ミキが腹をたてている理由は食事が出来なかったことではない。約束を反故にされたことにある。

もう何度、家族を裏切ったかわからない。もう何日、妻や娘の顔を見ていないのかわからない。ガーディアンの威信を復活させる——その為にジョーは遮二無二走り回ってきた。その為にジョーは家庭を省みなかった。妻のアンリは、理解ある女だった。ジョーはそれに甘えていた。甘えきり、どのような理解にも限界があることを忘れていた。

一週間前のこと。大規模な暴狼剤の密売組織の取り締まり。埠頭に止めた車の中で、ホシが動くのをじっと待っていたジョーの携帯が鳴った。アンリから——仕事中は電話をするなと口を酸っぱくして言っていたはずだった。

——なんだ？

——お仕事中ごめんなさい。今日は？

——大事なヤマがあるんだ。帰れない。

——そう。ねぇ、今日、何の日だか覚える？

——アンリ。今は大事な局面なんだ。くだらない話はあとにして

くれ。

――ごめんなさい。切るわ。

それ以来、アンリは口をきかなくなった。あとになって、その日が結婚十年目の記念日であることを思い出した。

『明日から、しばらく仕事を休む。休暇は、お前たちのために使うことに決めた』

『あのね父さん。私はもう二十歳なの。それは母さんに言ってあげてね』

邪険な返事だったが、ミキの声色は朗らかだった。

『ありがとう。相談なんだが、休暇前の最後の仕事を、ミキ、お前に手伝って欲しいんだ』

『どういうこと？』

『怪我人の手当てを頼みたい』

ロウジが怪訝そうに眉をひそめる。

『今から？』

『あぁ。三十分後は家に着く。そいつは肩を撃たれてるんだ。用意を頼む』

僅かな沈黙。ミキが息を飲む音が聞こえた。

『わかったわ』

『感謝する』

『その代わり、さっきの言葉、嘘だったら承知しないから』

『最愛の娘に誓って、果たすさ』

『最愛の母さんにも誓って』

『勿論だ』

通話を切る。車はいつしか三番街海岸沿いを走っていた。道路は空いている。この台風で、無理もなかった。時折倒壊した電柱を避けながら、しかし、ジョーはスピードを上げた。

『娘がいてな』

『あぁ？』

『血は繋がってない。妻は子供が産めない体だった。仕事柄、おれは家にあまり帰れない。一人で留守を任せきるのが不憫で、十年前、養子をとった。それが今の娘のミキだ』

狂狼相手に、何を話しているのだろうか。ジョーは自分の舌を戒めようとしたが、言葉が滑らかに口をついて出てくる。

『一番街の孤児院から、ミキを引き取った時、彼女は十歳だった。体重は二十キロ。やせ細ったミキの瞳に、光はなかった。ミキが、

初めておれ達に言った言葉は、助けてくれて、ありがとう、だった』

ウルフ・ロックにおける少年少女の三割は孤児だった。最低以下の賃金で働く労働者達は自分を食わせるのが精一杯。子供など邪魔でしかない。

一番街スラムには、そういった子供達を引き取る孤児院が溢れている。それを経営している狼のほとんどが小金持ちの変態。子供を性欲のはけ口にする屑野郎共だった。

ミキもまた、その犠牲者の一人。彼女が笑顔を取り戻すまで、いや、彼女が笑顔を《知る》までに、二年かかった。ミキが笑えるようになったのは、他ならぬアンリのとりとめのない愛情の成果だった。

『ミキは、医者を目指してる。勤勉にな。一人でも多くの、自分と同じ境遇の子供達を救いたいと言ってる』

一番街スラムの環境は劣悪。死の病に侵されながら、医者にかかることを許されない子供達はごまんといる。そういった子供達を無償で看る。それがミキの夢。

私が、子供達の病気を治すから、父さんは、ウルフ・ロックの病気を治して？　私のような孤児達が、大人達の欲望のはけ口にされない世界をつくって――。

『おれはな、変えたいと思ってる。この地獄みたいな島を、ミキが望む世界にな』

『……』

ロウジは神妙な面持ちで外を眺めていた。こうして見ると、いかに狂狼の双生児といえど、そこら辺の若造と見た目は変わらない。満身創痍なだけに、その縮こまった体は少年のようにすら思える。

しかし、この狼がウルフ・ロック中のマフィアに恐れられ、自らの妻を殺した狂狼の片割れである事実は揺るがない。

そんな狼相手に、おれは何をこんなに饒舌になっているのか？

ジョーは止まらない唇を噛み締めた。

『今から、お前をミキに治療させる。卵といえど、腕は確かだ、安心しろ。体力を回復させたら、どこへでも行け。しばらくはお前を追わんさ』

『あんたの娘は、ラッキーだったんだ』

唐突にロウジが口を開いた。ジョーはバックミラー越しにロウジの表情を伺う。それは、どう見ても、狂気のない、純粋無垢な子供のものだった。

『俺達に、迎えはこなかった。俺達だって、ハナからそんなものがねえってことを、わかってた。だからな、俺達は寄り添い合うしかなかったんだよ』

この言葉だけで、ロウジもまた孤児院の出であることを悟る。

『お前の相方の、オウキだったか。奴も、か？』

『あぁ。もう一人……レンと三人で、いつも一緒だった。俺とオ

ウキはレンに惚れてて、毎日体を張ってた。あんたの娘が孤児院出身なら、わかるだろう？　強くならなきゃならなかったんだ。どんな理不尽な暴力からも、レンを守るためにな』

レンというのは、ロウジの妻であったはずだ。不可解――なぜ、ロウジはレンを殺した？

口には出さなかった。しかし、一つだけ解ったことがある。

この狂狼が振るう理不尽な暴力は、やはりまた理不尽な暴力によって生み出されたものであること。こいつも、ウルフ・ロックという狂気の籠に捕らわれた哀れな狼に過ぎなかったということ。

そして恐らく、《自分の娘に似た何か》をロウジから感じとったからこそ、このように自分が饒舌になったことを。

『希望なんざ、何もない。いや、ないと思ってた。俺達がそれを見つけようとするには、この世界はあまりに暗すぎたんだ』

『だが、見つけたような口ぶりだな』

ロウジは自嘲気味に笑った。

『最後の希望は、俺の親友のもとにある。いや、親友だと思ってたやつのもとだ。俺はその希望から、母親を奪っちまった。もう、俺には何もねぇ。それが割と、耐え難いってことに最近気付いた』

沈黙。水滴が窓を打つ音が小さく、しかし間断なく聴こえるのみの静寂。

『少し、眠るぜ。喋りすぎた。忘れろよおっさん。俺はこの先二度とこんなことは口にしねぇし、思いもしねぇ。今のは、あんたに釣られて、ついつい出ちまった戯言だ』

『忘れよう。狂狼が実は、純真なガキであったことはな』

『口のへらねぇ野郎だ』

束の間、ジョーとロウジは目を合わせて、笑い合った。やがてロウジは眠り、郊外の、ジョーの家が見えてくる。周囲を森に囲まれた小高い丘の上に建てた煉瓦造りの二階建て。街までは車で十分の距離。

静けさが我が家の売りと自負しているジョーだったが、森の木々が暴風に揺らされ、獣の雄叫びのような声をあげている。

ロウジを抱えて車を降りると、背後の一番高い杉の木に、雷が落ちた。

ジョーには、それが何かの合図に思えてならなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6817b/

狂狼宴〜サガ〜

2010年10月9日22時31分発行